中　小　路　遺　跡

平成１５年度ふるさと農道整備事業横田安富地区埋蔵文化財発掘調査報告書

２００４年3月

益田市教育委員会

はじめに

益田市安富町は、市内でも益田平野に次ぐ広さを誇る横田安富平野をかかえ、古くから人々の生活が営まれていた地域です。それを物語る遺跡に、縄文時代晩期として知られる安富王子台遺跡や、弥生時代の環濠が見つかった羽場遺跡などがあります。

このたび安富町と横田町においてふるさと農道整備事業が計画されました。益田市教育委員会では、島根県益田農林振興センターの委託を受け、事業予定地内に所在する中小路遺跡の発掘調査を実施しました。

今回の調査では、弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居跡や、二棟の掘立柱建物跡がみつかりました。横田安富平野において竪穴住居跡が確認されたのは今回が初めてであり、当地域の歴史を考えるうえで貴重な発見といえます。

また、豊田公民館のご協力をいただき、西益田小学校の６年生３３名を迎えて発掘体験学習を実施することができ、現地での説明会においても多くの皆様に遺跡を見ていただくことができました。

本書はその調査結果をまとめたものです。益田市の歴史解明や、埋蔵文化財に対する皆様のご理解に多少なりとも役立てば幸いに存じます。

最後になりましたが、調査にあたりご指導、ご助言をいただきました島根県教育委員会、調査指導の諸先生方、ならびに現地調査に対し甚大なるご協力をいただきました島根県益田農林振興センター、地元関係者の皆様に心から御礼申し上げます。

平成１６年３月

益田市教育委員会
教育長　陶　山　勝

例　　言

1．　本書は島根県益田農林振興センターの委託を受け、益田市教育委員会が平成１５年度に実施した、ふるさと農道整備事業横田安富地区埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2．　発掘調査は下記の期間において実施した。

事業期間　：　平成１５年４月１４日～平成１６年３月２６日

現地調査　：　平成１５年５月８日～平成１５年８月３１日

3．　発掘調査を行った地番は、次のとおりである。

益田市安富町４９３番地，４９４番地，４９５番地，４９６番地，４９７番地，
５２８番地，５２９番地

4．　調査は次の組織で行った。

〔 調査主体 〕益田市教育委員会

〔事　務　局〕文化振興課課長　安達正美　　課長補佐　齋藤史和
文化財係係長　　木原　光　　主任主事　長澤和幸

〔調　査　員〕松本美樹（文化財係主事）

〔 調査指導 〕伊藤徳広（島根県教育委員会文化財課主事）
田中義昭（元島根大学教授）
村上　勇（広島県立美術館次長）
中村唯史（島根県立三瓶自然館指導員）

5．　調査にあたり協力および従事していただいた方々は次のとおりである（敬称略）。

○調査協力

大庭俊次、田原淳史（島根県埋蔵文化財調査センター）渡辺友千代、栗田美文（匹見町教育委員会）島根県益田農林振興センター、豊田公民館、横田安富地区県営ほ場整備事業安富工区推進委員会

○発掘調査作業

大畑和子、桐山省三、田中千代子、田中　登、中村　了、深井一雄、藤井典子、椋　厚子、椋　務、椋　教正、椋木秀奈代、椋　麗子

○室内整理作業

大久保眞紀、大谷浪江、岡﨑敦子、中村康恵、横山秀美

6．　本書で使用した遺構略号は次のとおりである。

ＳＫ－土坑　　ＳＩ－竪穴住居　　ＳＢ－掘立柱建物　　Ｐ－ピット

7．　挿図中の方位は国土調査法による第Ⅲ座標系のＸ軸方向を示す。

8．　本書掲載の遺跡出土資料及び実測図、写真などの資料は、益田市教育委員会で保管している。

9．　本遺跡の地質学的考察について、島根県立三瓶自然館の中村唯史氏に玉稿を賜った。

１０．本書の編集及び執筆は松本が行い、木原と長澤がこれを助けた。

本　文　目　次

１．調査にいたる経緯 …… １
２．遺跡の位置と環境 …… ２
３．調査の結果 …… ７
（１）調査区の設定 …… ７
（２）１区の調査 …… ７
（３）２区の調査 …… １５
（４）３区の調査 …… １８
（５）４区の調査 …… ２１
（６）５区の調査 …… ２４
（７）６区の調査 …… ２８
（８）７区の調査 …… ２９
４．まとめ …… ３０
５．「中小路遺跡　地形・地質的立地」　中村唯史 …… ３６

挿　図　目　次

第１図　中小路遺跡の位置 …… ２
第２図　中小路遺跡の位置と周辺の遺跡 …… ３
第３図　試掘調査区配置図と本調査区配置図 …… ５
第４図　全体の遺構配置図 …… ５
第５図　１区ピット実測図 …… ７
第６図　１区土層断面図 …… ８
第７図　１区出土遺物実測図（１） …… ９
第８図　１区出土遺物実測図（２） …… １０
第９図　１区出土遺物実測図（３） …… １１
第１０図　２，３区土層断面図 …… １３
第１１図　２区ピット実測図 …… １５
第１２図　２区出土遺物実測図（１） …… １５
第１３図　２区出土遺物実測図（２） …… １６
第１４図　炉跡内出土遺物実測図 …… １８
第１５図　ＳＩ０１実測図 …… １８
第１６図　３区遺構配置図 …… １９
第１７図　３，４区出土遺物実測図 …… ２０
第１８図　４区西壁土層断面図 …… ２１

第１９図　４区遺構配置図 …… ２２
第２０図　４区ＳＢ０１実測図 …… ２３
第２１図　５区遺構配置図 …… ２４
第２２図　５，６，７区西壁土層断面図 …… ２５
第２３図　５区ＳＢ０２実測図 …… ２７
第２４図　６区遺構配置図 …… ２８
第２５図　７区遺構配置図 …… ２９
第２６図　５，６，７区出土遺物実測図 …… ３０
第２７図　横田盆地周辺の地質分布と切峰面等高線 …… ３６
第２８図　横田盆地北部の微地形図 …… ３７

表　目　次

第１表　確認調査結果一覧 …… １
第２表　周辺の遺跡一覧 …… ４
第３表　１区北出土遺物観察表 …… ３１
第４表　１区南出土遺物観察表 …… ３２
第５表　２区出土遺物観察表 …… ３３
第６表　３区出土遺物観察表 …… ３４
第７表　４区出土遺物観察表 …… ３５
第８表　５区出土遺物観察表 …… ３５
第９図　６，７区出土遺物観察表 …… ３５

写　真　図　版　目　次

図　版　１　　空中写真
図版２－１　　旧中小路集落を望む
　　－２　　中小路遺跡調査前
図版３－１　　１区完掘状況
　　－２　　川岸状地形検出状況
　　－３　　遺物包含層堆積状況
図版４－１　　１区ピット完掘状況
　　－２　　２区完掘状況
　　－３　　２区ピット検出状況

図版５－１　３区北完掘状況
－２　竪穴住居跡（東から）
－３　炉跡検出状況
図版６－１　炉跡内土層堆積状況（北から）
－２　炉跡内土層堆積状況（東から）
－３　炉跡完掘状況
図版７－１　３区南完掘状況
－２　ＳＫ０１検出状況
－３　４区北完掘状況
図版８－１　４区北ピット完掘状況
－２　柱痕残存状況
－３　４区南完掘状況
図版９－１　４区南ピット完掘状況
－２　５区北完掘状況
－３　５区南完掘状況
図版１０－１　遺物出土状況
－２　６区北完掘状況
－３　７区北完掘状況
図版１１　１区北出土遺物（１）
図版１２　１区出土遺物（２）
図版１３　１区及び２区出土遺物
図版１４　２区出土遺物
図版１５　２～７区出土遺物
図版１６　６，７区出土遺物

１．　調査に至る経緯

横田安富地区ふるさと農道整備事業は益田市安富町及び横田町地内において計画され、平成１４年６月、島根県益田農林振興センターから益田市教育委員会に埋蔵文化財の有無について照会があった。事業予定地周辺は平成１０年度に分布調査、平成１２年度に安富地区真空ステーション建設予定地の確認調査を行っており、その結果から東側と北側の農道予定地については遺跡は存在しないと判断された。しかし西側については分布調査の際、広範囲にわたって遺物が採取されていたため、西側を中心に同年秋、確認調査を行った。２ｍ四方のグリッドを１３箇所に設定したところ（第３図左）、北側よりの１１、１２、１３グリッドにおいて奈良・平安時代から中世にかけての集落跡と考えられる遺構が発見された。そこで遺跡の範囲を確認するために１０グリッドと１１グリッドの間に新たに１４、１５グリッドを設定した。その結果、新たな２地点からも遺構が確認され、結果として農道予定地のうち長さ約１５０ｍの範囲において遺跡の存在が明らかとなった。益田農林振興センターに工事計画の変更を協議したところ、計画変更は困難であるとの回答であり、１１グリッドから１３グリッドにかけての約１５０ｍの範囲を発掘調査することで合意した（第３図右）。平成１５年４月１４日、埋蔵文化財発掘調査の委託契約を結び、同年５月８日から発掘調査にはいった。なお、同年８月９日に現地説明会を開き、地元住民を中心に約４０名の参加があった。

グリッド番号	調査面積	地山までの深さ	調　査　所　見	出土遺物	遺跡の有無
1	３．６㎡ (1.94m×1.88m)	△ 0.17m	遺構及び遺構面なし		無
2	３．７㎡ (1.94m×1.9m)	△0.24m	遺構及び遺構面なし		無
3	３．５㎡ (1.8m×1.94m)	△0.2m	遺構及び遺構面なし	青磁	無
4	３．５㎡ (1.9m×1.86m)	△0.27m	遺構及び遺構面なし	須恵器、土師質土器 青磁、白磁	無
5	３．６㎡ (1.85m×1.95m)	△0.16m	遺構及び遺構面なし		無
6	３．８㎡ (1.94m×1.96m)	△0.18m	遺構及び遺構面なし	須恵器、土器	無
7	３．６㎡ (1.88m×1.9m)	△0.15m	遺構及び遺構面なし		無
8	３．６㎡ (1.92m×1.9m)	△0.16m	遺構及び遺構面なし	近世以降の陶磁器	無
9	３．６㎡ (1.92m×1.86m)	△0.18m	遺構及び遺構面なし	須恵器	無
10	３．７㎡ (1.9m×1.96m)	△0.22m	遺構及び遺構面なし	須恵器、土師質土器	無
11	３．６㎡ (1.9m×1.9m)	△0.22m	ピット３基検出	縄文土器、白磁	有
12	３．６㎡ (1.88m×1.92m)	△0.15m	東西方向に伸びる幅１５cmの溝状遺構 ピット２基検出	土師器、須恵器 土師質土器	有
13	３．５㎡ (1.94m×1.8m)	△0.38m	水害に伴う撹乱層あり 東西方向に伸びる幅５２cmの溝状遺構	須恵器、土師質土器 青磁	有
14	４．０㎡ (1m×4m)	△0.2m	遺構なし。ただし、深さ２０cmで検出した黄褐色粘質土（地山）は遺構面の可能性あり。	須恵器	有
15	４．０㎡ (1m×4m)	△0.2m	遺構なし。ただし、深さ２０cmで検出した黄褐色粘質土（地山）は遺構面の可能性あり。	須恵器、土師質土器	有

第１表　確認調査結果一覧

２．　遺跡の位置と環境

（１）遺跡の位置

益田市は島根県の西端に位置しており、益田川、高津川両河川によって形成された平野上に市街が広がっている。東は那賀郡三隅町、南は美濃郡美都町と匹見町及び鹿足郡日原町と津和野町、西は山口県阿武郡田万川町に接し、北側は日本海に面した面積約３０２㎡、人口約５万人の都市である。

中小路遺跡の所在する安富町は益田市内の中央西寄りに位置し、高津川と匹見川の合流地点から下流に向かって平野が広がる、市内でも有数の穀倉地帯である。横田安富地区においては大正９年に耕地整理が起工され、同１４年に完工している。現在の行政区分では、安富町、横田町、梅月町、本俣賀町、左ヶ山町の５町で『豊田地区』と呼ばれている。

遺跡の東側約２００ｍの位置には、かつて中小路集落が存在していたが（図版２上）、昭和１８年に当地域を襲った水害を契機に集落は国道９号線沿いに移転していったという。現在では水害を免れた蔵が数棟残っているのみである。

（２）益田市の歴史的環境

縄文時代

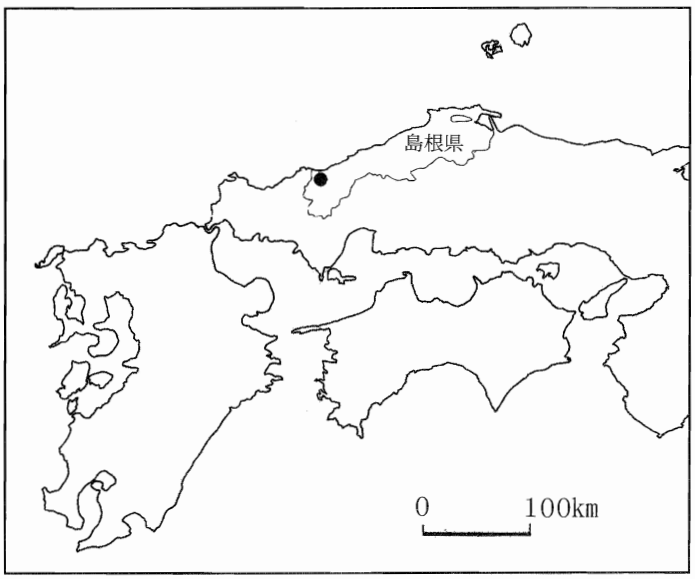
益田市内において縄文時代の遺跡はいくつか知られているが、代表的な遺跡に安富王子台遺跡があり、縄文時代晩期の土器が発見されている。また、三宅御土居跡北側にある土居後遺跡からも、同時期の遺物が発見されている。

弥生時代

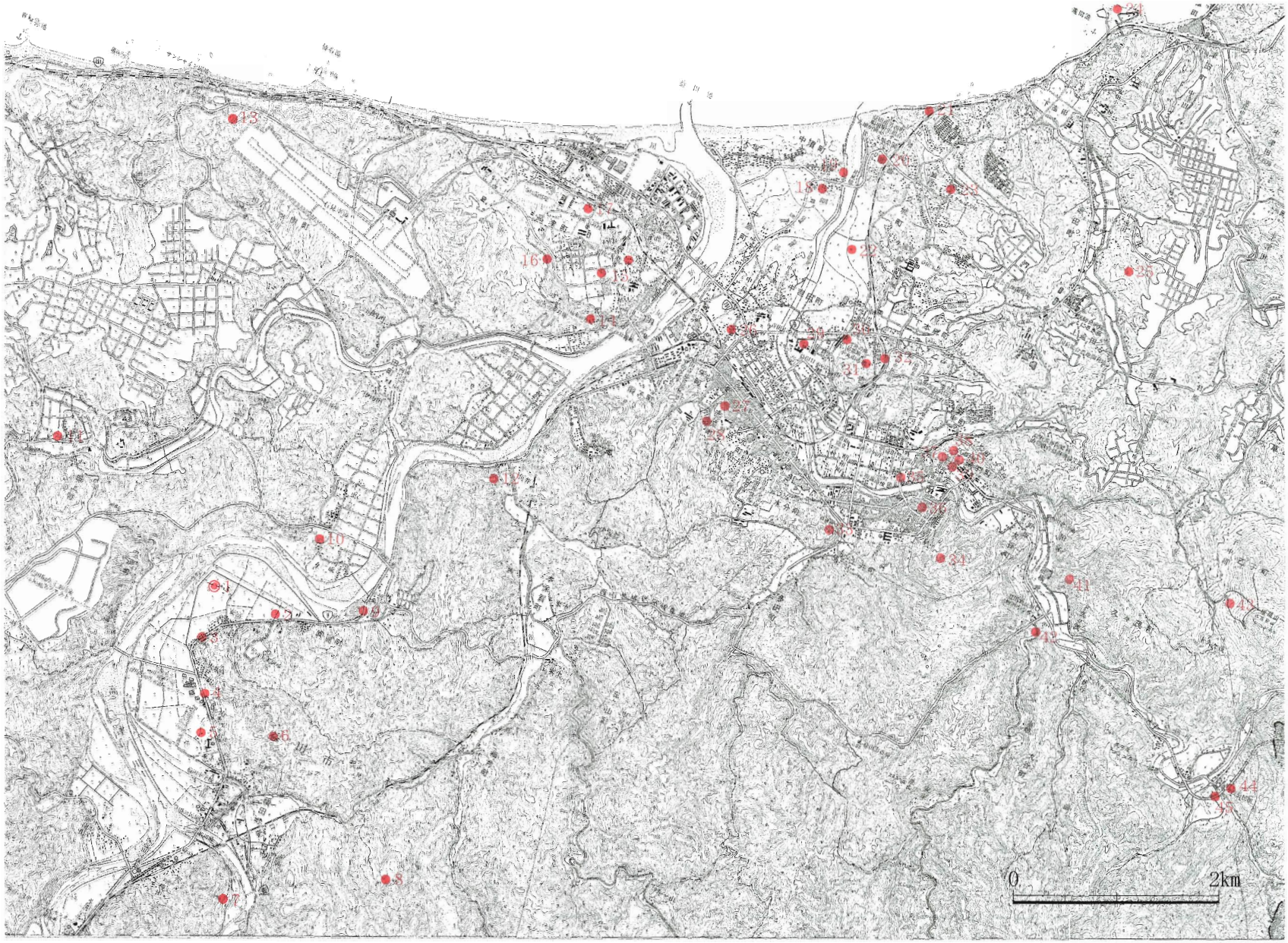
弥生時代には、前述の安富王子台遺跡から前期の土器が出土している。羽場遺跡では、弥生時代中期の土器が多数出土した環濠や、土坑墓が発見されている。またサガリ遺跡は高津川左岸の丘陵上に位置しており、後期の竪穴住居跡が発見されている。

古墳時代

古墳時代には、益田平野周辺の丘陵部を中心に古墳が築かれている。なかでも大元１号墳は全長８８ｍの前方後円墳で、石見最大の古墳である。主体部は未発掘であるが、墳丘からは円筒埴輪や葺石が見つかっている。スクモ塚古墳は造り出しを設けた円墳であるといわれており、全長約１００ｍをはかる。小丸山古墳は大元１号墳、周布古墳（浜田市）に次ぐ石見地方第３位の前方後円墳で、周囲に周濠と外堤を備えている。出土品には、馬鐸、鈴杏葉などの馬具や、珠文鏡、鉄斧などが見つかっている。四塚山古墳群からは工事中に三角縁神獣鏡が出土しており、益田平野の勢力が大和政権と政治的な結びつきを深めていたと考えられている。



第１図　中小路遺跡の位置



第２図　中小路遺跡の位置と周辺の遺跡

番号	遺　跡　名	番号	遺　跡　名
1	中小路遺跡	24	鵜の鼻古墳群（県史跡）
2	羽場遺跡	25	大元１号墳
3	安富王子台遺跡	26	間所遺跡
4	大畑遺跡	27	北長迫横穴群
5	家下遺跡	28	南長迫横穴群
6	豊田城跡	29	日赤敷地遺跡
7	本郷寺城跡	30	中世今市船着場跡（市史跡）
8	石塔寺権現経塚（陶製経筒は県有文化財）	31	小丸山古墳（市史跡）
9	安富城跡	32	四塚山古墳
10	大嶽城跡	33	稲積城跡
11	白上古墳	34	七尾城跡（県史跡）
12	角井城跡	35	三宅御土居跡（県史跡）
13	大溢遺跡	36	古川遺跡
14	高津城跡	37	片山横穴群
15	浜寄遺跡	38	秋葉山古墳
16	サガリ遺跡	39	勝達寺跡
17	松ヶ丘遺跡	40	式内社染羽天石勝神社（本殿は重要文化財）
18	福王寺（県有形文化財石造十三重塔）	41	大谷城跡
19	安福寺跡	42	大谷土居跡
20	式内社櫛城賀姫神社	43	式内社佐毘売山神社
21	高浜古墳	44	大峠遺跡
22	沖手遺跡	45	上久々茂土居跡
23	スクモ塚古墳（国史跡）		

第２表　周辺の遺跡一覧

古墳時代後期には、白上古墳、鵜の鼻古墳群等が築かれている。北長迫横穴墓群は丘陵東側の急斜面に築造され、もともとは５０穴以上が存在したと推定されている。また横田町の上野横穴から出土した須恵器、刀剣類は現在、東京国立博物館に寄託されている。

この時期の生産遺跡としては須恵器窯の存在が知られており、市の北東部に芝、本片子窯跡が存在している。

古　代

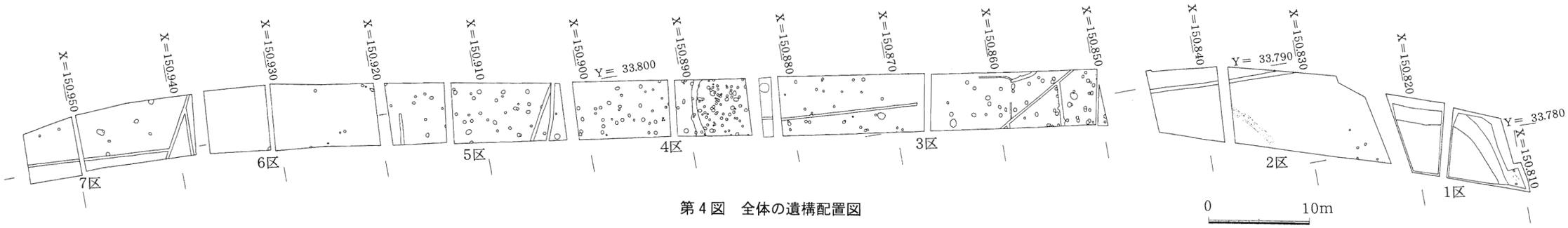
奈良時代から平安時代には灰釉陶器が出土した根ノ木田遺跡があり、ほかに大溢遺跡、浜寄遺跡から当該期の土師器、須恵器が出土している。

中　世

中世前期の遺跡には羽場遺跡や大畑遺跡があり、羽場遺跡からは掘立柱建物跡や中国製の白磁、青磁など多数が出土した。沖手遺跡は益田川右岸の低地に位置し、中世前期以降の陶磁器類や、集落跡が確認されている。また石塔寺権現跡から発見され、豊田神社に伝わる陶製経筒は、平安時代末から鎌倉時代初期のものと考えられている。これらの経筒は中国で製作され日本にもたらされたもので、北部九州からの発見例が多く、益田に招来された経緯など注目されている。

中世後期になると益田氏関連の遺跡が数多く残されており、上久々茂土居跡、大谷土居跡、三宅御土居跡などの居館跡や、七尾城跡などの城跡がある。

第３図　試掘調査区配置図と本調査区配置図



第４図　全体の遺構配置図

３．　調査の結果

（１）調査区の設定

発掘調査予定地は７つのほ場にわたっており、それぞれがコンクリート畦によって区画されていたため、北から南に向かって順に１区から７区とした（第４図）。試掘調査の結果から、地山までの堆積土は２０ｃｍ程度と浅いものであったため、耕作土除去の段階から人力による作業を行った。発掘予定地の地形は１区から７区に向かってゆるやかに高まっており、それに比例して遺構の残存は悪くなっていた。

なお、試掘調査の結果を受けて、本調査の範囲は長さ約１５０ｍ、幅は農道幅である７ｍを予定したが、そのうちには幅約２．５ｍの現道部分が含まれていた。現道下は既に水道管が埋設されており、また地山までの深さは２０ｃｍ程度と非常に浅いため、撹乱を受けている可能性があった。そのため、水田部分の調査を先に行い、その結果により現道部分の調査について検討することとした。

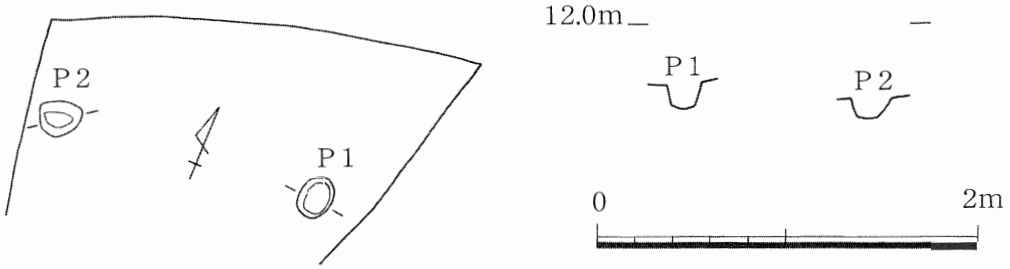
（２）１区の調査

層　序　１区の基本層序は、表土下に客土である褐灰色土、暗灰黄色土が堆積し、後述の川岸状地形以外の部分ではその直下は地山であった（第６図）。これらの客土は調査区の東側にのみ堆積しており、大正時代に行われたほ場整備に伴うものとも考えられる。部分的に地山ブロックを多く含んだ明褐色系の土層が堆積しており、幾度かにわたる削平、造成がされたと考えられる。

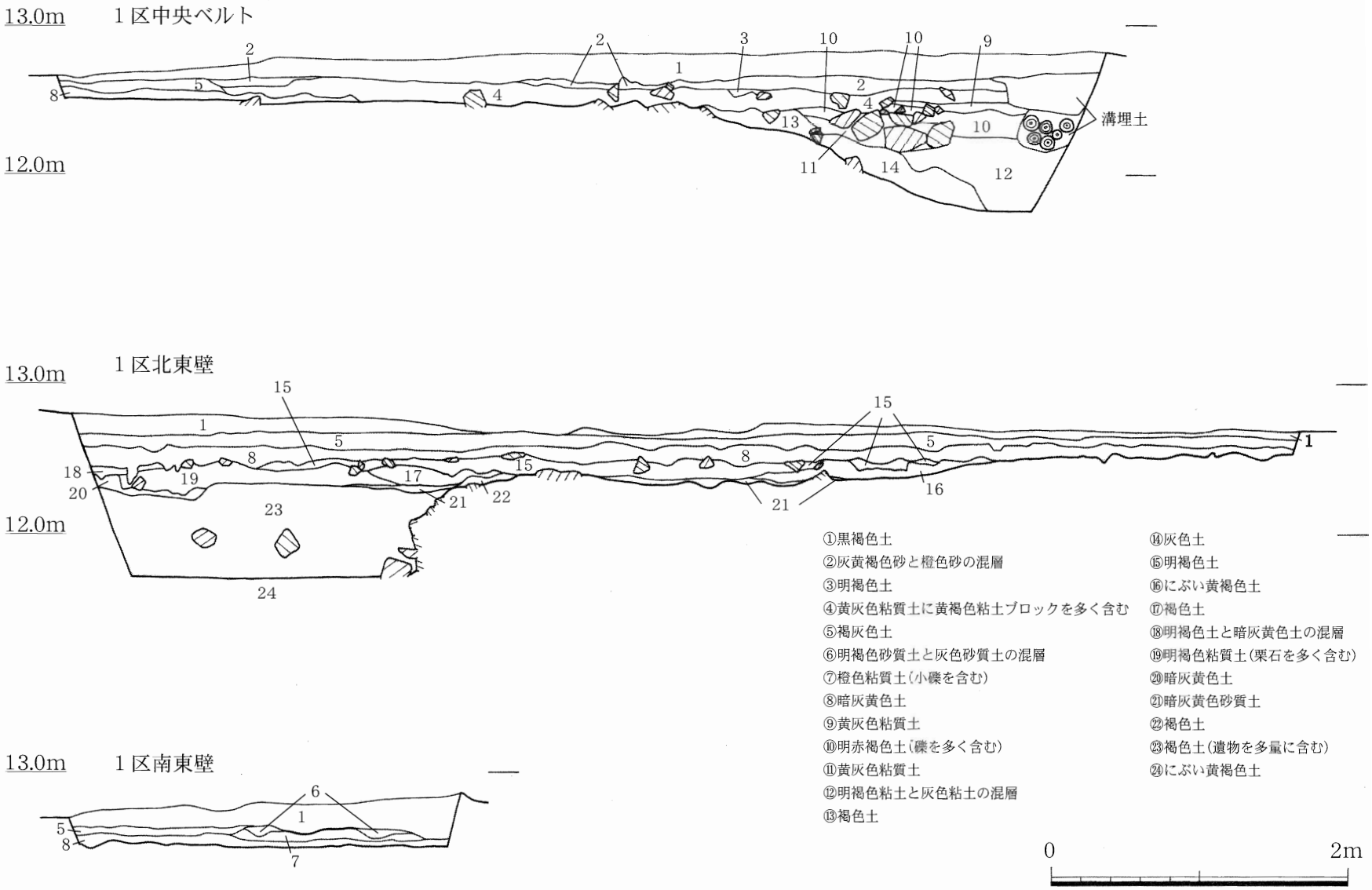
調査区の北側、及び西側では川岸状の地形が確認されており、特に北東側ではその地形を埋める形で須恵器、土師器等を多量に含んだ遺物包含層が堆積していた。西側で確認された川岸状地形には、灰色シルト層の上に礫を多く含む造成土が投げ入れられたように堆積している。１区の地山は、２０ｃｍ前後の風化した礫を多量に含む明赤褐色土であった。

遺　構　前述のように、調査区の北側から西側にかけて川岸状の地形が検出された。この地形は調査区の西壁に沿うようにして北進し、調査区南端から約６ｍの地点で緩やかに東へ向かっていた。そして地山である礫層を削るかたちでなっており、傾斜角は調査区の東側において約６０度であった。調査区の北西隅が最も深くなっており、表土から１．５ｍ掘り下げたところで灰色シルト層にあたり、１．８ｍ掘り下げた時点でもまだ続くようであったため、このレベルで発掘を停止した。

調査区北東隅では、川岸状地形に沿って遺物包含層が約６０ｃｍの厚さで堆積しており、包含層中からは奈良時代から平安時代にかけての土師器、須恵器がまとまって出土した。また、包含層下の黄褐色土からピットが掘り込まれていた。ピットは２基確認でき、いずれも川岸の傾斜下に位置していた（第５図）。Ｐ１は径１７ｃｍ、深さ１５ｃｍ、Ｐ２は径２３ｃｍ、深さ１０ｃｍであった。ピットの埋土はシルトではない土壌化したものであった。これらのピットは部分



第５図　１区ピット実測図


13.0m
1区中央ベルト
12.0m
溝埋土
13.0m
1区北東壁
12.0m
13.0m
1区南東壁
①黒褐色土
②灰黄褐色砂と橙色砂の混層
③明褐色土
④黄灰色粘質土に黄褐色粘土ブロックを多く含む
⑤褐灰色土
⑥明褐色砂質土と灰色砂質土の混層
⑦橙色粘質土(小礫を含む)
⑧暗灰黄色土
⑨黄灰色粘質土
⑩明赤褐色土(礫を多く含む)
⑪黄灰色粘質土
⑫明褐色粘土と灰色粘土の混層
⑬褐色土
⑭灰色土
⑮明褐色土
⑯にぶい黄褐色土
⑰褐色土
⑱明褐色土と暗灰黄色土の混層
⑲明褐色粘質土(栗石を多く含む)
⑳暗灰黄色土
㉑暗灰黄色砂質土
㉒褐色土
㉓褐色土(遺物を多量に含む)
㉔にぶい黄褐色土
0
2m

第6図　1区土層断面図

的に検出されたものであり性格は不明であるが、川岸近くから見つかったことを考えると船着場等の可能性も考えられる。

出土遺物　第７図、第８図は１区北東隅の遺物包含層中から出土した遺物である。遺物はほとんどが土師器と須恵器で、時期的にも近いものがまとまって出土している。

１～１２は土師器の甕である。これらはいずれも口縁端部を「く」の字形に引き出したものであるが、口縁部の形態においていくつかのバリエーションが認められ、それに基づき分類を試みた。

１～６は口縁端部に比較的厚みをもち、大きく外方へひらくグループである。２～４は外面胴部にタテハケ調整が、内面には頚部以下にヘラケズリを行う。

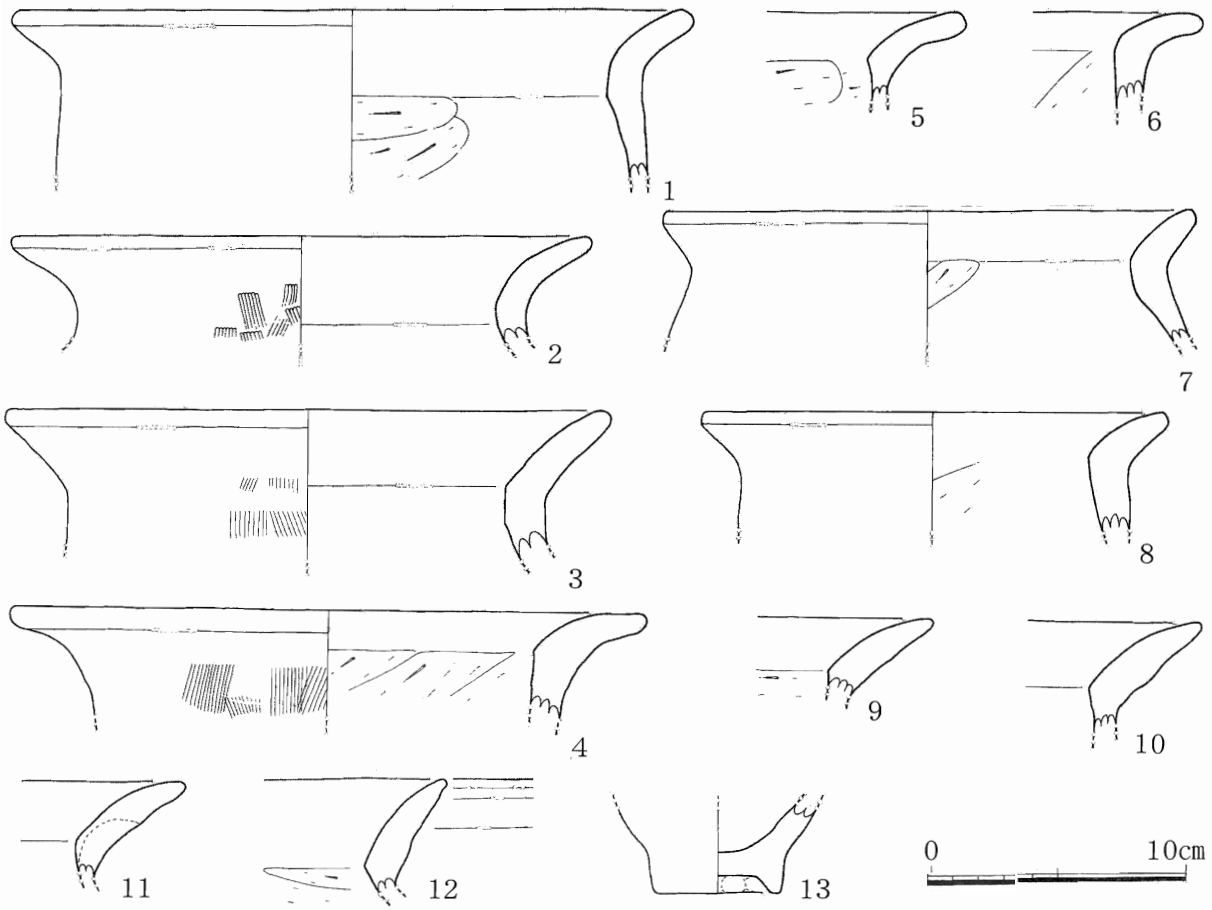
７、８は前者と比較して全体的にやや小ぶりであり、口縁部の反り返りもやや短めである。内面は頚部以下にヘラケズリ調整が行われている。

９～１２は口縁端部を先細りぎみに鋭く引き出したものである。口縁部外面には二重口縁のなごりを思わせるようにナデによりゆるい稜線をつくりだしている。いずれも口縁部のみの出土であり、体部の形態、及び調整は不明である。

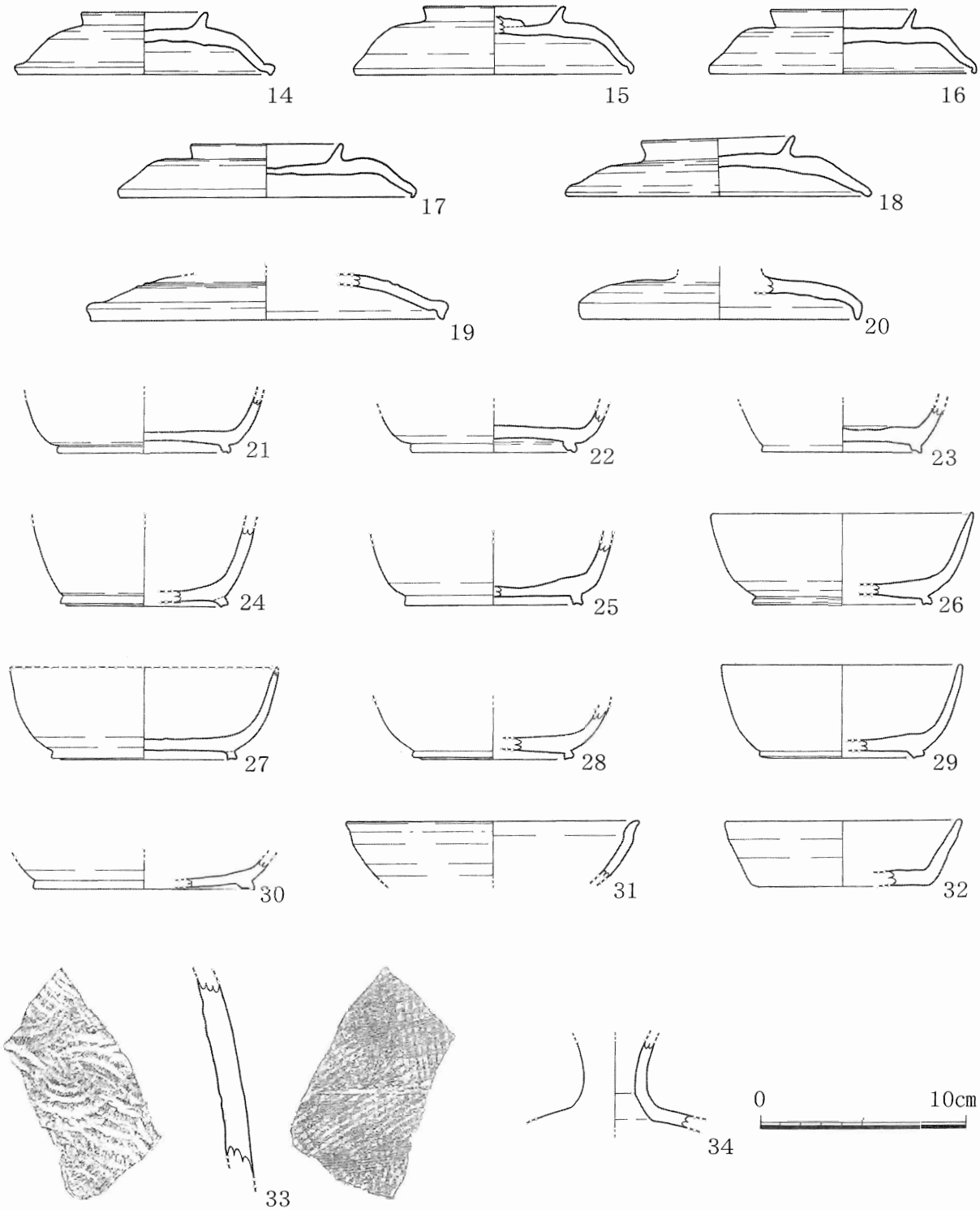
１３は弥生土器の壷と思われる。底部はユビナデにより高台状につくりだされ、体部は小さくひらきながら立ち上がる。色調は橙黄色を呈し、１～２mmの砂粒を多く含む。

第８図は須恵器である。これらはほとんどが蓋と身であり、蓋については輪状つまみのつくもの、身については高台のつくものと、ほぼ同じ形態のものが多量に出土している。

１４～２０は蓋で、１４～１８は輪状つまみをもつものである。１４は口径１２．４ｃｍ、つまみ径６．２ｃｍ、器高３．０ｃｍをはかる。口縁部は外方に湾曲し端部内側に凹面をもつ。



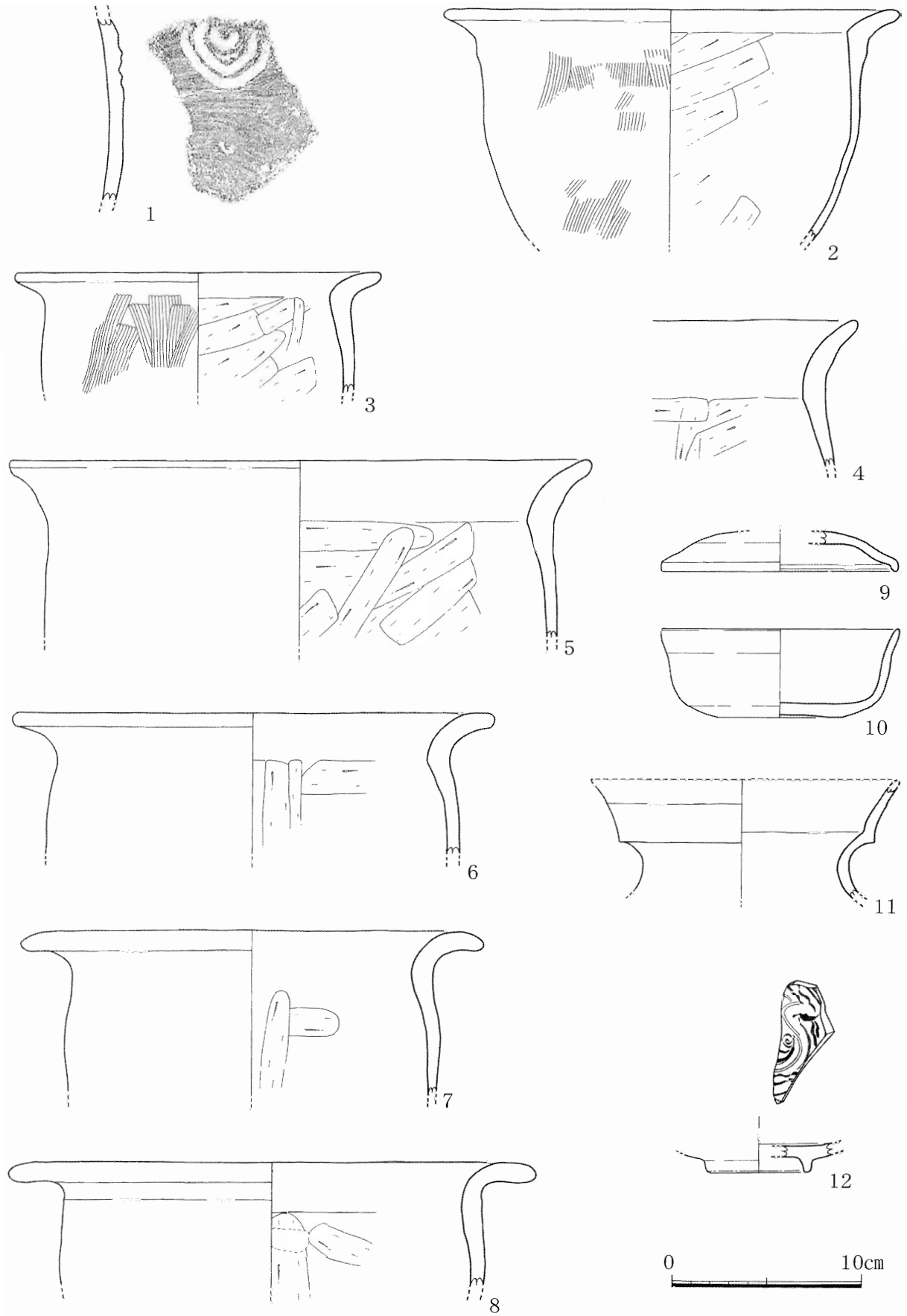
第７図　１区出土遺物実測図 (1)



第８図　１区出土遺物実測図 (2)

１５～１７は、前述のものと比較して外方への湾曲が緩やかなものである。天井部に回転ヘラケズリを施し、つまみを貼り付ける。１８は体部が偏平化し、口縁部の外方への湾曲はなくなり端部内側に凹線がめぐるのみとなる。

１９は口縁端部が短く直立し、断面は鳥の嘴状を呈する。天井部には沈線がめぐっている。２０は口径１３．６㎝をはかり、口縁端部を下垂させる。



第９図　１区出土遺物実測図 (3)

２１～３２は身で、２１～３０は貼付高台をもち、その端部に凹線あるいは凹面を持つものである。凹線によって分割された高台端部の内側、あるいは外側の発達度合いによって、いくつかのグループに分けられるようである。

２１、２２は高台端部の中央に凹線をめぐらせるものである。底部はヘラ切りののち、ナデ調整が行われている。

２３は前者と比較して高台端部の凹線が浅くなったもので、高台端部の外方において接地している。高台径は７．８ｃｍで、底部はヘラ切りである。

２４～２８は高台端部の内側が発達し、わずかにつまみ出した内側、あるいは内外両側において接地するものである。２６は全体の器形をうかがうことのできる資料であり、体部下半にヘラケズリを行っている。体部はゆるやかにひらきながら口縁部にいたる。口径は１２．８ｃｍ、器高４．５ｃｍ、高台径は８．６ｃｍをはかる。

２９は高台端部に凹面を持つもので、断面台形のしっかりしたものである。高台内側において接地しており、体部から口縁部にむかってほぼ垂直に立ち上がる。

３０は幅の広い高台で、２９よりさらに「ハ」の字形にひろがっている。端部には凹面を持ち、高台径は１０．８ｃｍである。

３１は口縁部を屈曲させ、端部は外反する。口径は１４．２ｃｍをはかる。

３２は高台をもたないものである。体部は平底から逆「ハ」の字形に広がる。口径は１１．６ｃｍ、底径は８．４ｃｍ、器高は３．２ｃｍをはかる。

３３は甕の胴部である。器壁の厚さは約１．２ｃｍで、内面は同心円タタキ、外面は格子タタキを行う。

３４は壷の頚部。焼成は良好で色調は淡灰色を呈する。

第９図の１～１０は川岸状地形を埋める灰色シルト層中から出土した遺物である。これらは時期幅がかなり認められる。

１は縄文土器の深鉢と思われる。外面に渦巻状の文様が描かれ、内外面とも条痕文を施している。胎土には１ｍｍ前後の砂粒を多く含み、色調は灰茶褐色を呈する。

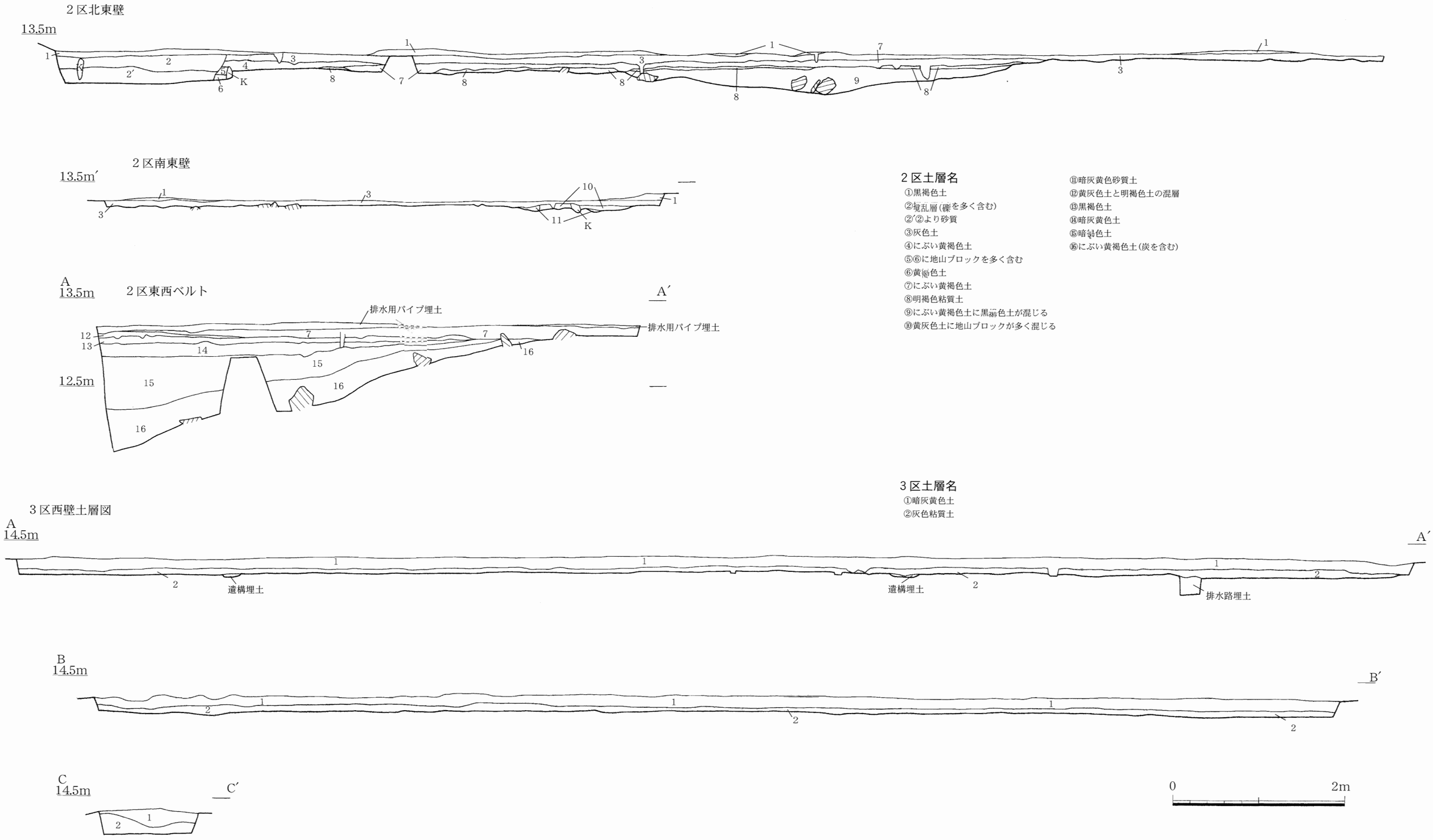
２～８は土師器の甕である。２、３は全体的にやや小ぶりで、口縁部も小さく外反させている。外面はタテハケ、内面はヘラケズリによる調整を行う。

４、５は口縁端部を先細りぎみに引き出し、口縁部外面にはナデによってゆるい稜線がつくられる。６～８は口縁部を外方へ強く屈曲させるものである。６は口径２５．６ｃｍをはかり、外面はナデ、内面はヘラケズリによる調整が行われている。７、８もほぼ同様の形態をしており、焼成は良好である。

９、１０は須恵器。９は蓋で口径は１２．４ｃｍ、口縁端部を外方にゆるく湾曲させ、内面に凹線をめぐらせる。１０は身で高台をもたないものである。底部はヘラによって切り離された後、ヘラケズリが行われている。９、１０とも焼成は悪く、軟質で色調も灰白色を呈している。

１１は弥生土器の甕と思われる。口縁部は二重口縁で、内外ともナデ調整が行われる。色調は灰黄褐色を呈する。

１２は白磁の碗。内面底部にヘラ彫りによる文様が彫られ、釉は青味がかった透明釉がかかる。



第10図　2，3区土層断面図

（3）２区の調査

層　序　　２区は調査区の北側と南側では地山までの堆積の厚さが大きく異なっており、南側にいくにつれて浅くなっている（第１０図）。基本的には、表土下に黄褐色土が堆積しているが、調査区の西側に向かって地山が低くなっているため、それに沿って暗灰黄色土、暗褐色土、黄褐色土が堆積する。遺構面は地山に掘られた１面のみである。

遺物は１５層までは出土したが、１６層からは炭が出土するのみで遺物は確認できなかった。また、調査区北側は幅約２ｍにわたって撹乱を受けており、土層が乱れている。

遺　構　　調査区の北東側においてピットが５個確認された（第１１図）。いずれも深さは１０ｃｍ程度と大変浅く、その上半は削平を受けているものと思われる。ピットから遺物は出土しておらず、調査区の東隅で検出されたこともあり、建物等を復元するまでにはいたらなかった。

また、調査区の西側において幅約３５ｃｍの排水路が検出されている。排水路内には竹が敷き詰められており、田の排水に伴うものと考えられる。

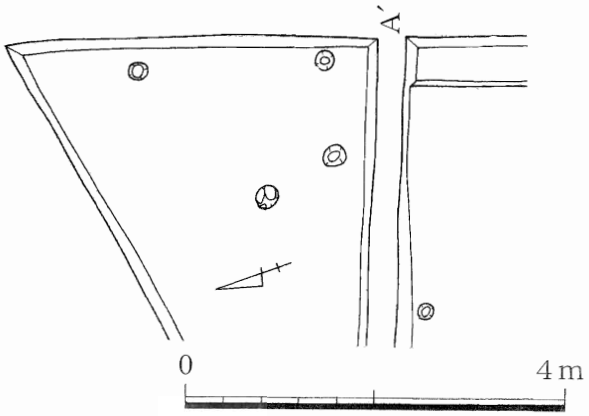
出土遺物　　２区からは中世の陶磁器類がまとまって出土した。第１２、１３図に示した遺物は２区の遺構外から出土したものである。遺物の出土土層は、表土以下すべての層にわたっており、一括して図示した。

第１２図は２区から出土した石器である。１～４は黒曜石製で、１は凹基無茎式の石鏃。長さは２．９ｃｍ、幅２．２ｃｍ、厚さ０．４ｃｍをはかる。２～４は剥片。

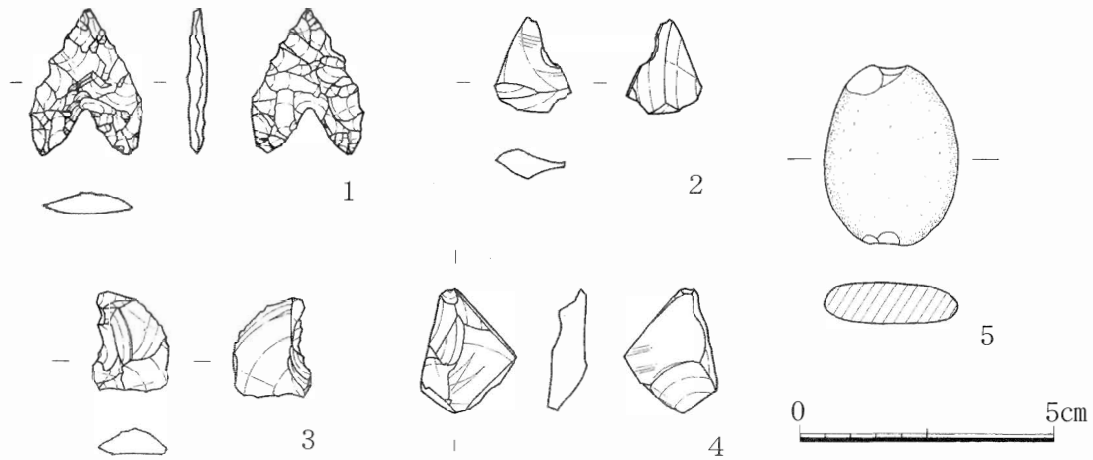
５は川原石を転用した石錘で、長さは７．１ｃｍ、幅５．３ｃｍ、厚さ１．６ｃｍをはかる。長辺両端に打ち欠きが認められる。

第１３図の１、２は縄文土器の深鉢と思われる。１は外面口縁下に突帯を貼り付ける。胎土は２ｍｍ前後の砂粒を多く含んでいる。２は外面口縁下に段を持ち、体部は逆「ハ」の字形にひらく。色調は淡黄褐色を呈する。

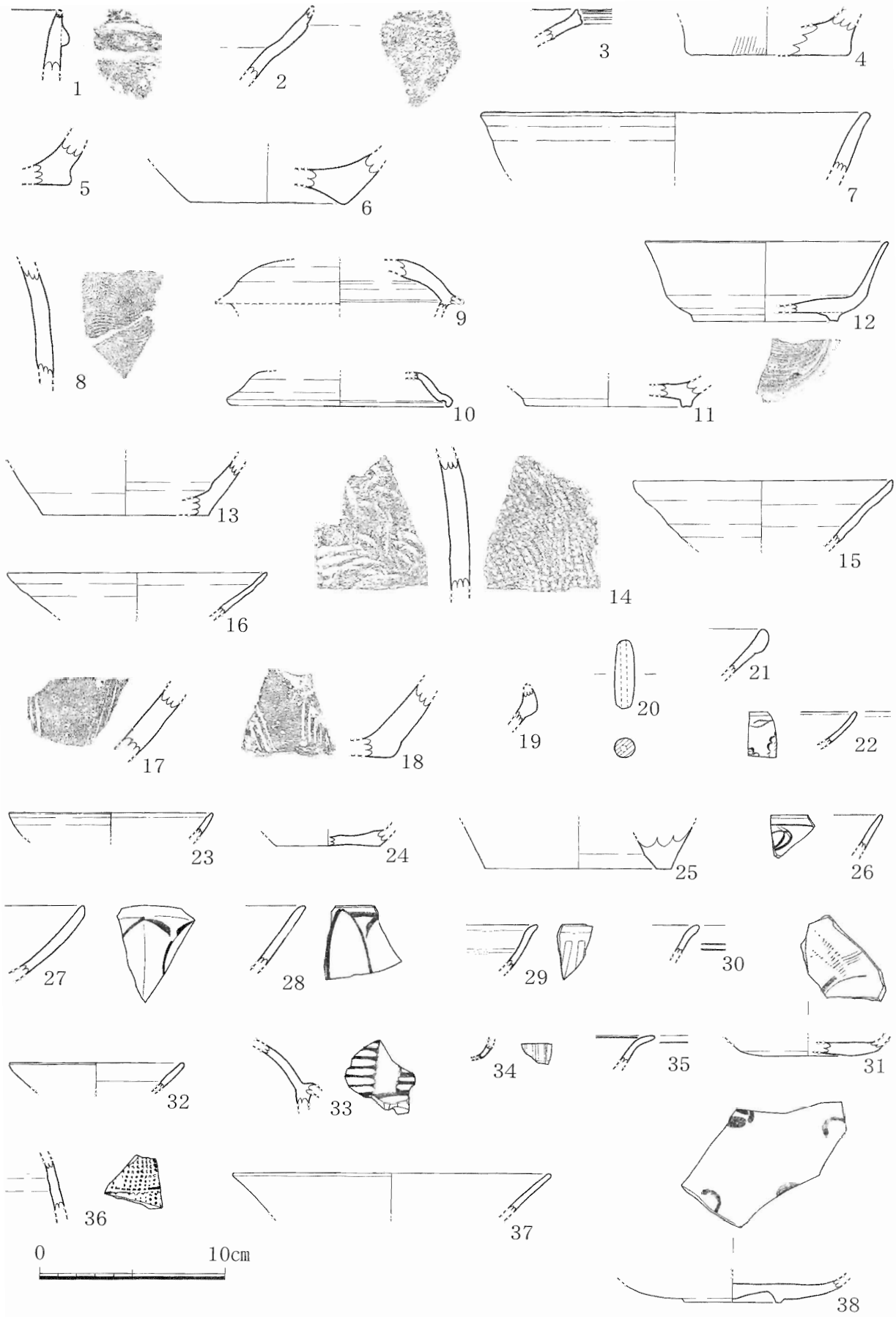
３～６は弥生土器の甕と思われる。３は口縁端部に面を持ち、２条の沈線をめぐらせる。胎土には２ｍｍ前後の砂粒を多く含み、色調は淡黄褐色を呈する。４～６は底部である。４、５は平底で、



第11図　２区ピット実測図



第12図　２区出土遺物実測図（1）



第13図　2区出土遺物実測図 (2)

５は外面をタテハケ調整する。６は上げ底の底部である。

７、８は土師器の甕と思われる。７は口縁部で逆「ハ」の字形にひらき、内外ともナデ調整を行う。８は胴部片で、器壁は０．９ｃｍとやや厚手である。外面に波状文を描く。

９～１４は須恵器である。９、１０は蓋で９はかえりをもち、全体的に丸みを帯びた器形である。１０は口縁端部を鳥の嘴状にしている。１１、１２は身で、いずれも高台端部をわずかにくぼませている。１２は底部に回転糸切り痕が明瞭に残る。１３は壷の底部で、ロクロナデによる調整を行う。底径は９．０ｃｍをはかる。１４は甕の胴部である。外面は格子タタキ、内面は同心円タタキ痕が残る。

１５、１６は土師質土器の皿。いずれも薄いつくりで、体部から口縁部にかけて逆「ハ」の字形に大きくひらく。１７は瓦質土器のすり鉢である。内面にすり目がみられるが、小片のため単位など詳細は不明である。１８は備前焼系のすり鉢で、色調は灰色を呈している。１９は東播系の鉢。口縁端部を「く」の字形に肥厚させている。焼成は良好で胎土に白色粒子を多く含む。２０は土錘。長さは３．７ｃｍ、幅１．１ｃｍ、中央には直径０．３ｃｍの孔をあける。

２１～２５は白磁である。２１は碗で、口縁端部を玉縁状に肥厚させる。２２～２４は皿で、口縁端部の釉を剥ぎ取ったものである。２２はやや薄手で、内面胴部に毛彫り文様を描く。２４は底部で、平底の釉は剥ぎ取られている。２５は壷の高台部分である。厚く削りだされた高台は無釉で、直径は１０ｃｍをはかる。

２６～３３は青磁である。２６～３０は碗で２６は内面にヘラ彫り文様を描く。２７は鎬蓮弁文の碗。２８は鎬を持たない蓮弁文碗で、色調は暗緑色を呈する。２９は口縁端部を外方に引き出したもので、外面体部には蓮弁文状にヘラ彫りが施される。３０は口縁端部をゆるく外反させたもので、外面口縁下に沈線をめぐらせている。３１、３２は同安窯系青磁の皿。３１は内底部にクシ状工具による文様を描く。底径は４．６ｃｍをはかり、底部の釉を剥ぎ取っている。３２は前者と同形態の皿の口縁部である。内面体部と底部の境に段がめぐる。３３は香炉と思われる。内外面に厚く釉がかかり、色調は緑灰色を呈する。

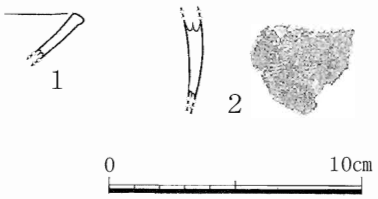
３４は青白磁の合子。身の破片と思われ、体部上半に青味がかった透明釉がかかっている。３５は染付の碗で、口縁端部を外反させ、口縁部の内外に圏線をめぐらせている。

３６、３７は朝鮮製陶磁器である。３６は粉青沙器の壷で、外面体部に象嵌文を施している。３７は刷毛目文の碗。

３８は肥前系磁器の皿である。高台は低く、小さい。

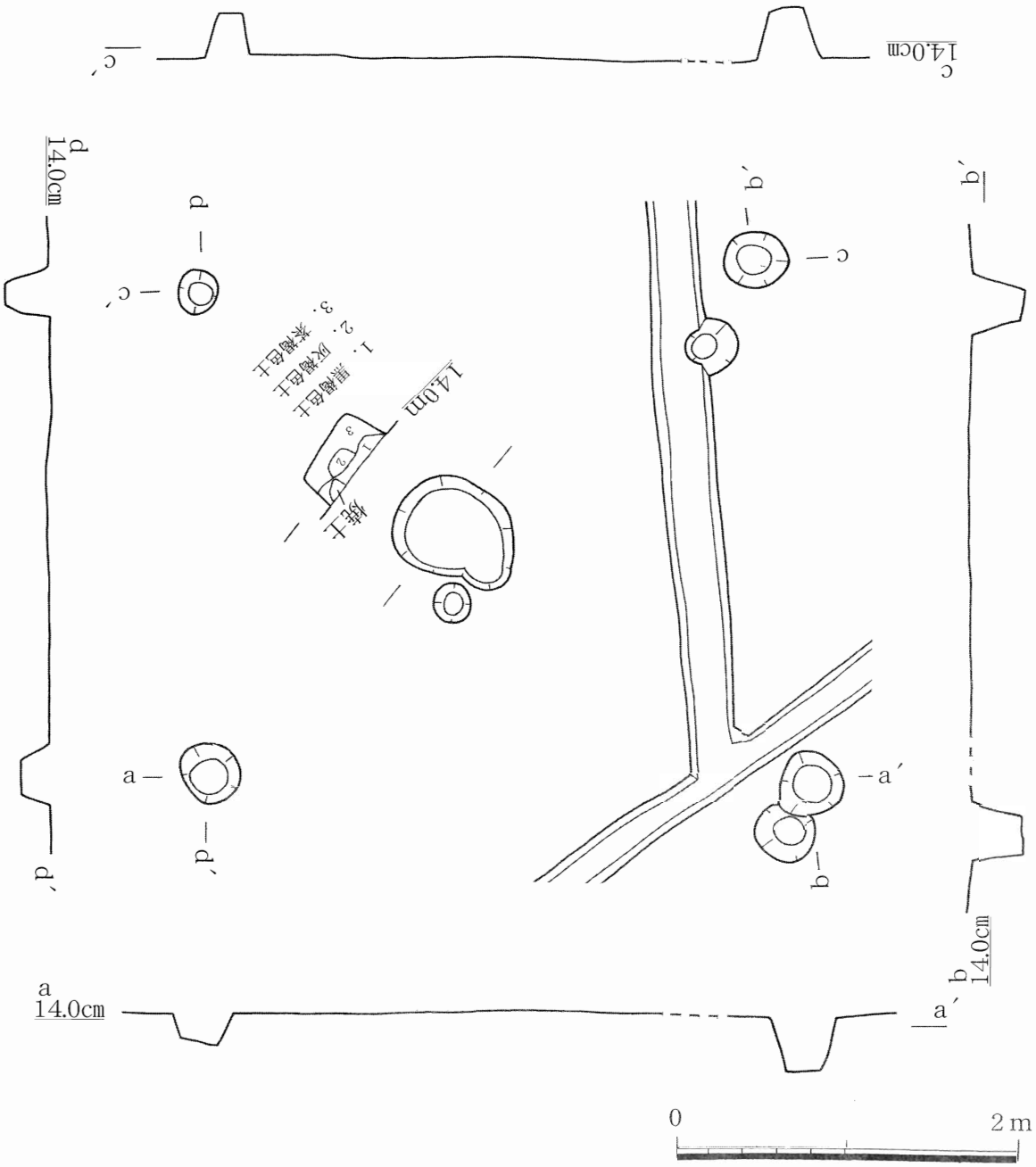
（４）３区の調査（第１６図）

３区と２区の間には、旧中小路集落へと続く道がはしっており、この道を境として３区は一段高まったところに位置している。遺構の残りも２区に比べ、比較的よく残っていた。

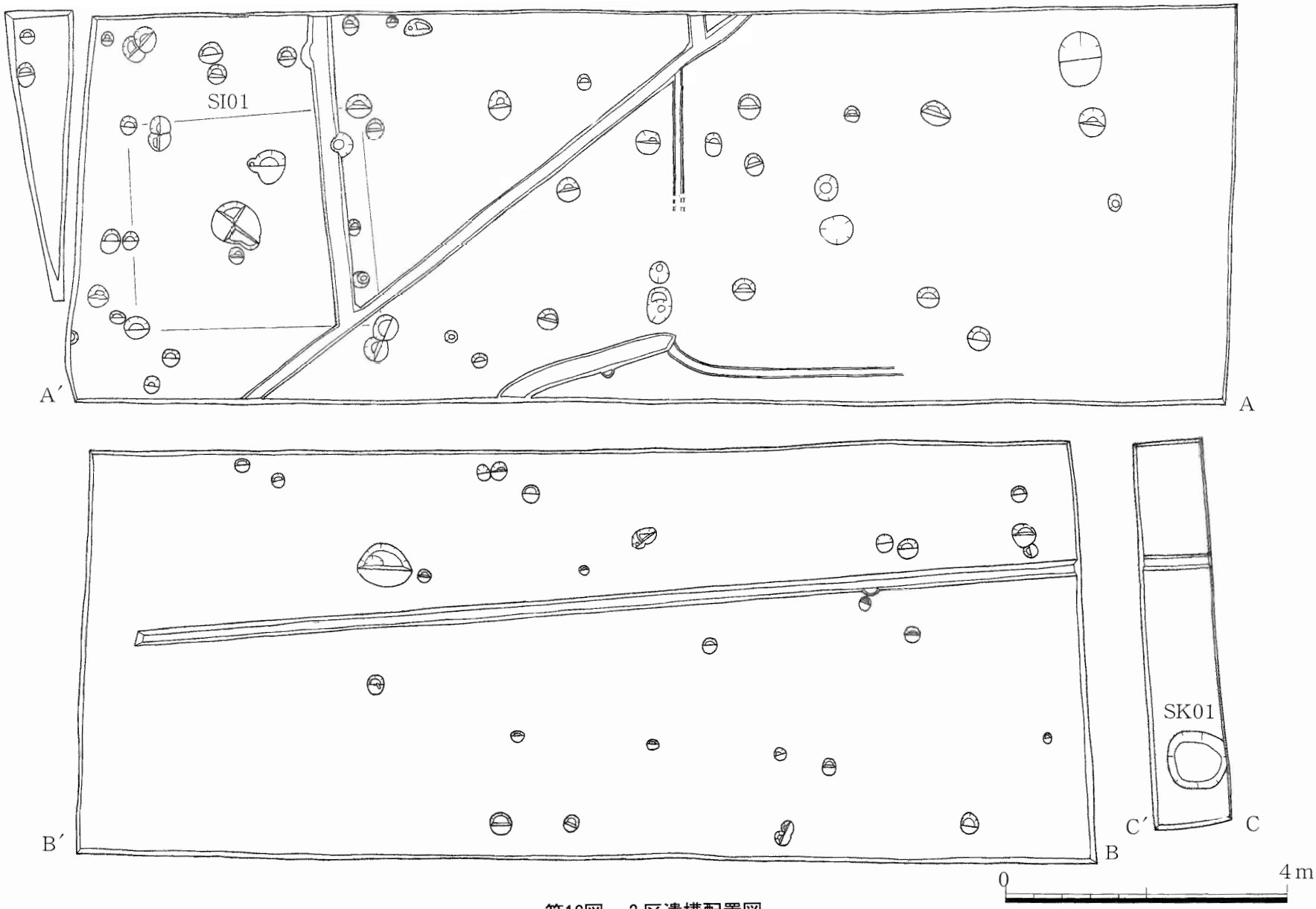


第14図　炉跡内出土遺物実測図

層　序　　３区以南の土層堆積は、非常に単純なもので、表土下に１層あるいは２層堆積し、地山にいたる（第１０図）。遺構は地山に掘り込まれた１面のみであった。３区では表土下に灰色粘質土が堆積し、地山までは約２０ｃｍであった。



第15図　ＳＩ01実測図



第16図　3区遺構配置図

遺　構

１）竪穴住居址（第１５図）　　３区では調査区北側において、竪穴住居の炉跡と柱穴を検出した。削平を受けたためか、住居址の掘り込みは検出することができなかったが、硬く踏みしめられた床面が確認できた。住居址床面からは炉跡と思われるピット１基と、柱穴と想定されるピット４基を検出した。

炉跡は住居址のほぼ中央部に位置しており、径は約６０ｃｍ、深さは３０ｃｍ、断面方形のしっかりしたものである。炉跡内の土層堆積は、最下層に茶褐色土が約２０ｃｍ堆積した後、炉のほぼ中央に灰褐色土が直径約２０ｃｍ、厚さ約１０ｃｍにわたって詰め込まれた状態で検出された。また赤く焼けた焼土と炭片が多く出土した。

柱は４本と思われ、その径は約３０ｃｍ、深さは２０～３０ｃｍ、柱と柱の間隔は約３ｍである。

遺物は炉跡内から土師器片が若干出土したが、小片であった（第１４図）。

２）ピット群　　調査区の全体から多数のピットが検出されている。深さは２０ｃｍ前後のものであり、建物等の復元はできなかった。

３）土　壙（ＳＫ０１）　　土壙は調査区の南端において、１基確認された。径は約９０ｃｍ、深さは２０ｃｍと非常に浅いものであった。３区と４区には標高にして約４０ｃｍの段差があり、ＳＫ０１はちょうどこの段差の真下に位置していた。そのため、ＳＫ０１の上半は削平された可能性が高いと思われる。

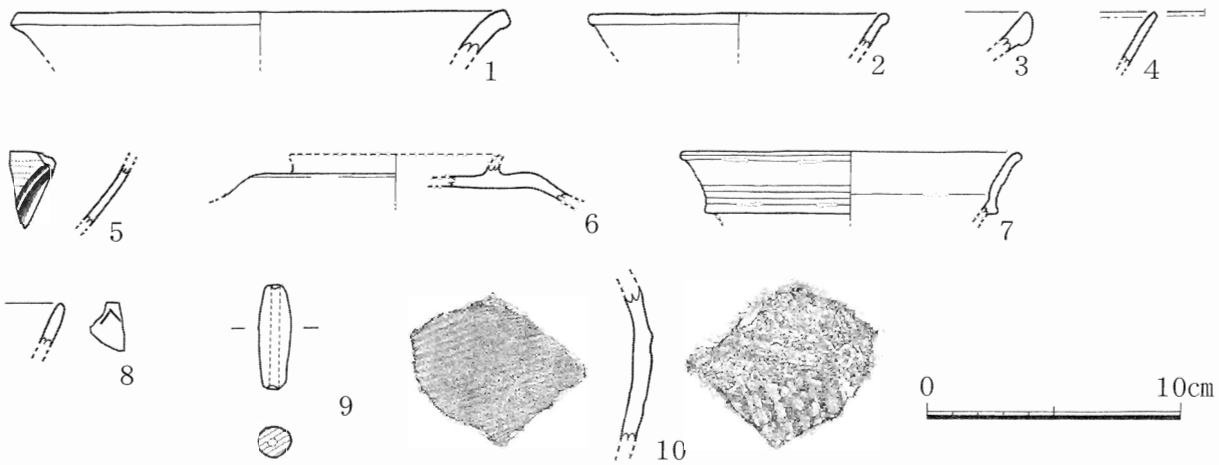
また、３区でも南側において調査区に平行してはしる幅約２０ｃｍの排水路が見つかっており、内部には竹が敷き詰められていた。

出土遺物　　炉跡内から土師器の破片が出土している。第１４図の１は甕の口縁部で、端部を外方にわずかにつまみ出す。色調は淡橙色を呈し、微砂粒を多く含む。２は胴部片で、外面はハケ調整が行われている。

第１７図の１はＳＫ０１から出土した弥生土器の甕と思われる。口縁部は逆「ハ」の字形にひらき、端部をわずかにつまみだしている。

２～４は遺構外出土遺物である。２は土師器の甕である。やや小ぶりで口縁は外反し、端部を丸くおさめる。

３、４は白磁。３は碗で口縁端部を玉縁状に肥厚させる。４はいわゆる口ハゲ皿と呼ばれるもので、口縁端部の釉を剥ぎ取っている。５は同安窯系青磁の碗の胴部。



第17図　３，４区出土遺物実測図

（５）４区の調査（第１９図）

４区以南は３区からさらに一段高まったところに位置しており、３区との標高差は約４０ｃｍである。

また４区は当遺跡内で最もよく遺構の残っていた調査区であり、後述のように検出されたピットも深さのあるしっかりとしたものが多く見つかっている。

層　序　　３区と同様に表土下に灰色粘質土が堆積し、調査区北側において部分的に地山ブロックを多く含む灰黄褐色土が堆積していた（第１８図）。遺構面はこの灰黄褐色土から掘り込まれた１面のみで、地表から地山までは２０ｃｍ程度であった。

遺　構　　４区においてはピットを約１３０個検出し、本遺跡中最も密度が高くなっている。建物は掘立柱建物が１棟復元できた。また、調査区中央において溝状遺構が検出されている。

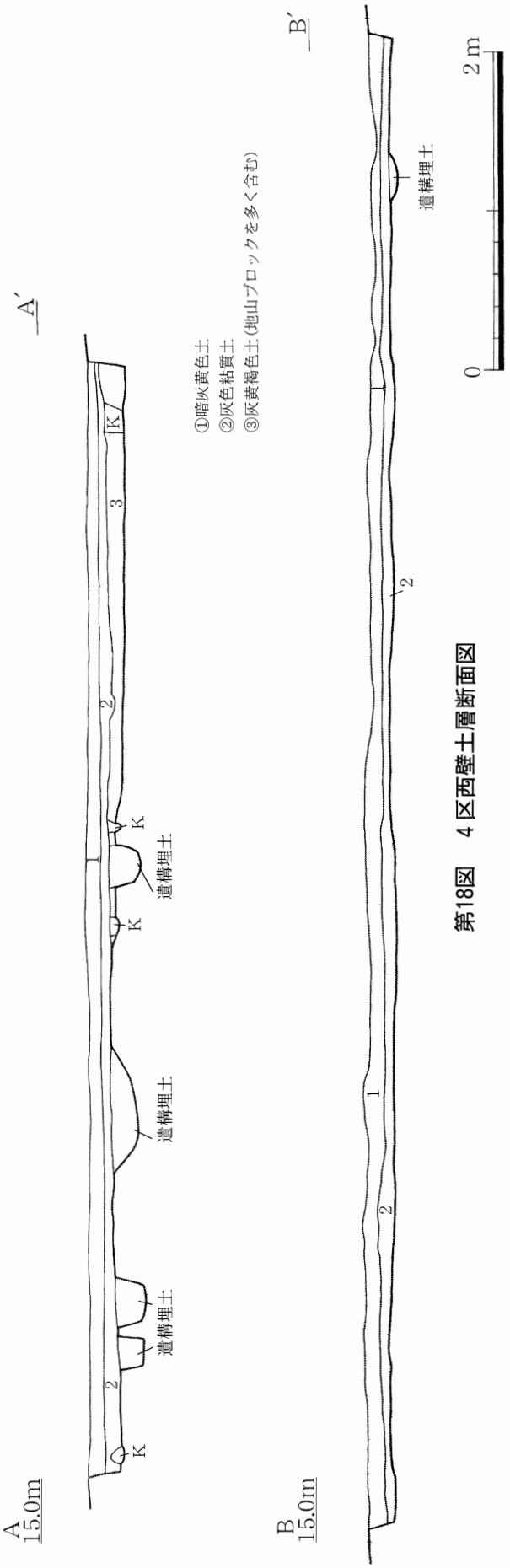
１）掘立柱建物跡（ＳＢ０１）　　調査区の南側で検出された（第２０図）。

規模は３間以上×１間以上で、柱間は約２ｍである。柱穴の深さは約２０～３０ｃｍで、内部には２０ｃｍ程度の扁平な川原石がおかれているものもあった。柱穴の埋め土は灰色粘質土であり、３区以南で確認されたピットの埋め土が黒褐色土であったのとは異なっている。

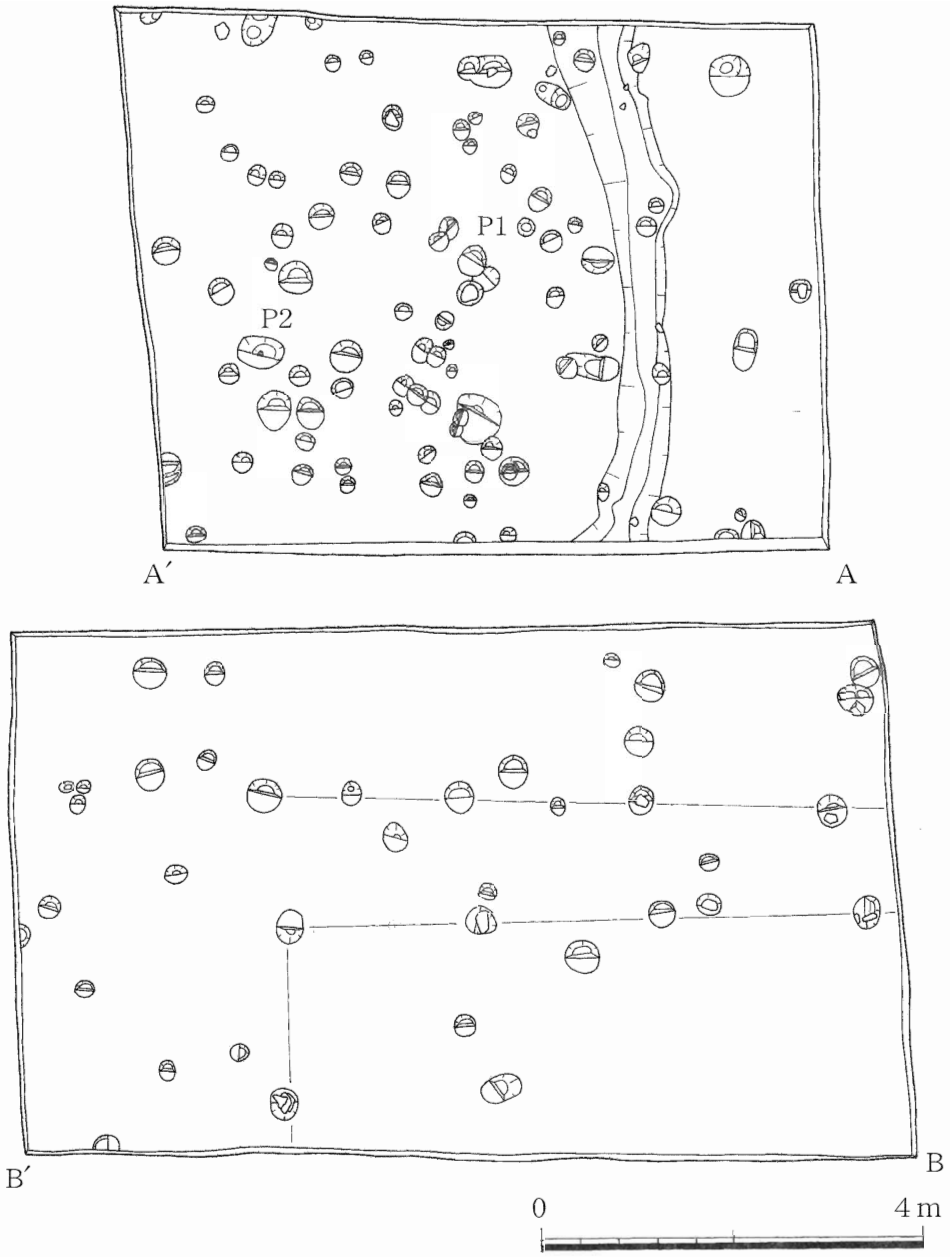
また、建物跡の東約１．２ｍの位置には柵状柱列が確認された。柱穴の直径は約３０ｃｍ、深さは約３０～４０ｃｍ、柱間は建物跡と同様に約２ｍである。埋め土も同様に灰色粘質土である。

なお、ＳＢ０１に伴うピット内から遺物は出土していないため、時期等は不明である。

２）溝　跡　　調査区のほぼ中央において東西にはしる溝跡が確認された。幅は上端が５～９ｍ、下端は２．５ｍ～５ｍ、深さは約０．１５ｍ、断面はレンズ状を呈している。溝の埋め土は前述の掘立柱建物跡と同様に灰色土である。溝跡の埋め土を取り除いたところ、溝底からもピットが検出



第18図　４区西壁土層断面図



第19図　4区遺構配置図

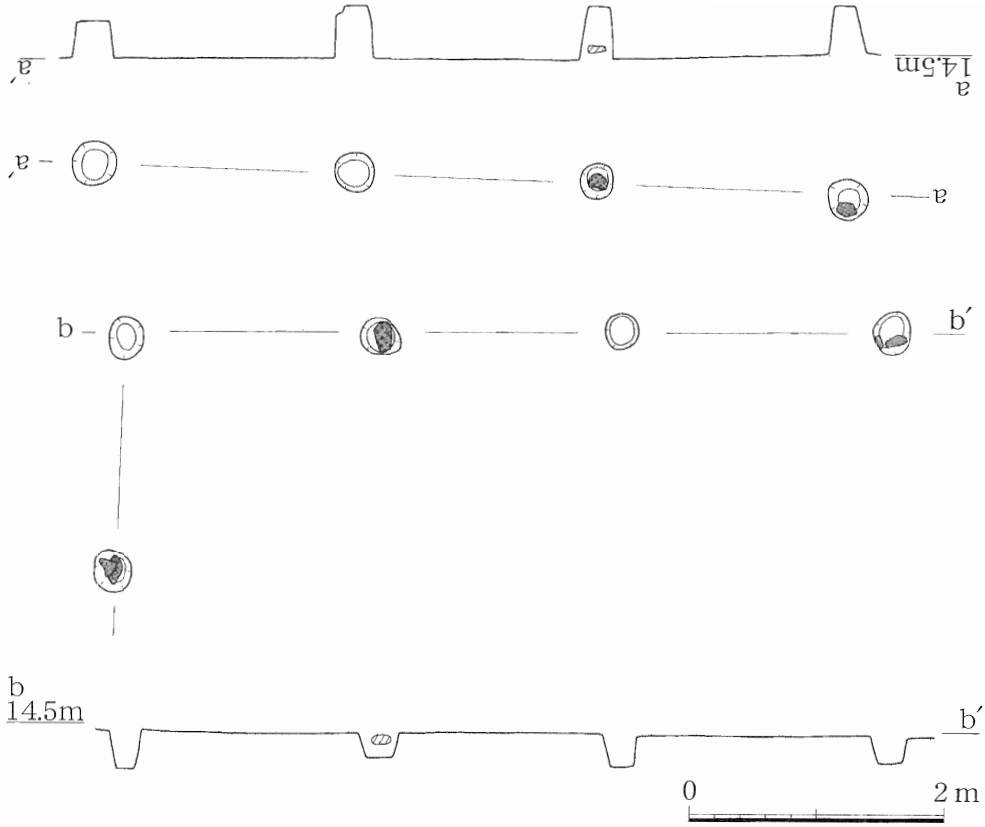
された。4区北側ピット群の埋め土は黒褐色土であることや、ピットとの切りあい関係から、この溝跡はピット群に伴うものではなく、ＳＢ０１に伴うかあるいは近い時期に埋められたと考えられる。

なお、溝内から遺物は出土しておらず、拳大の川原石が出土したのみであった。

3）ピット群　　4区では約１３０個のピットが確認できたが、そのほとんどは建物等の復元を行うことができなかった。ピットは直径２０ｃｍ～３０ｃｍ程度のものが多く、深さは２０～４０ｃｍ程度、断面台形のしっかりしたものが多い。またＰ２には柱材が残存していた。ピットの中には、人頭大の川原石が入っているものもあった。

出土遺物　　当調査区の出土遺物はわずかであった。

第１７図の６はＰ１から出土した須恵器である。輪状つまみを持つ蓋で、天井部はヘラケズリを行う。



第20図　４区ＳＢ01実測図

７～１０は遺構外出土遺物である。７は土師器の甕と思われる。二重口縁をもち、内外とも丁寧なナデ調整を行い、色調は淡黄褐色を呈する。８は青磁の碗。外面体部に蓮弁文を描くもので、１５世紀後半から１６世紀前半頃のものと思われる。９は土錘。長さは４．１ｃｍ、幅１．３ｃｍをはかり、中央に直径０．４ｃｍの孔をあける。焼成は良好で、淡橙灰白色を呈する。１０は瓦質土器の鍋である。胴部の破片で器壁は０．７ｃｍをはかり、外面は格子タタキ、内面はハケナデ調整を行う。

（6）５区の調査（第２１図）

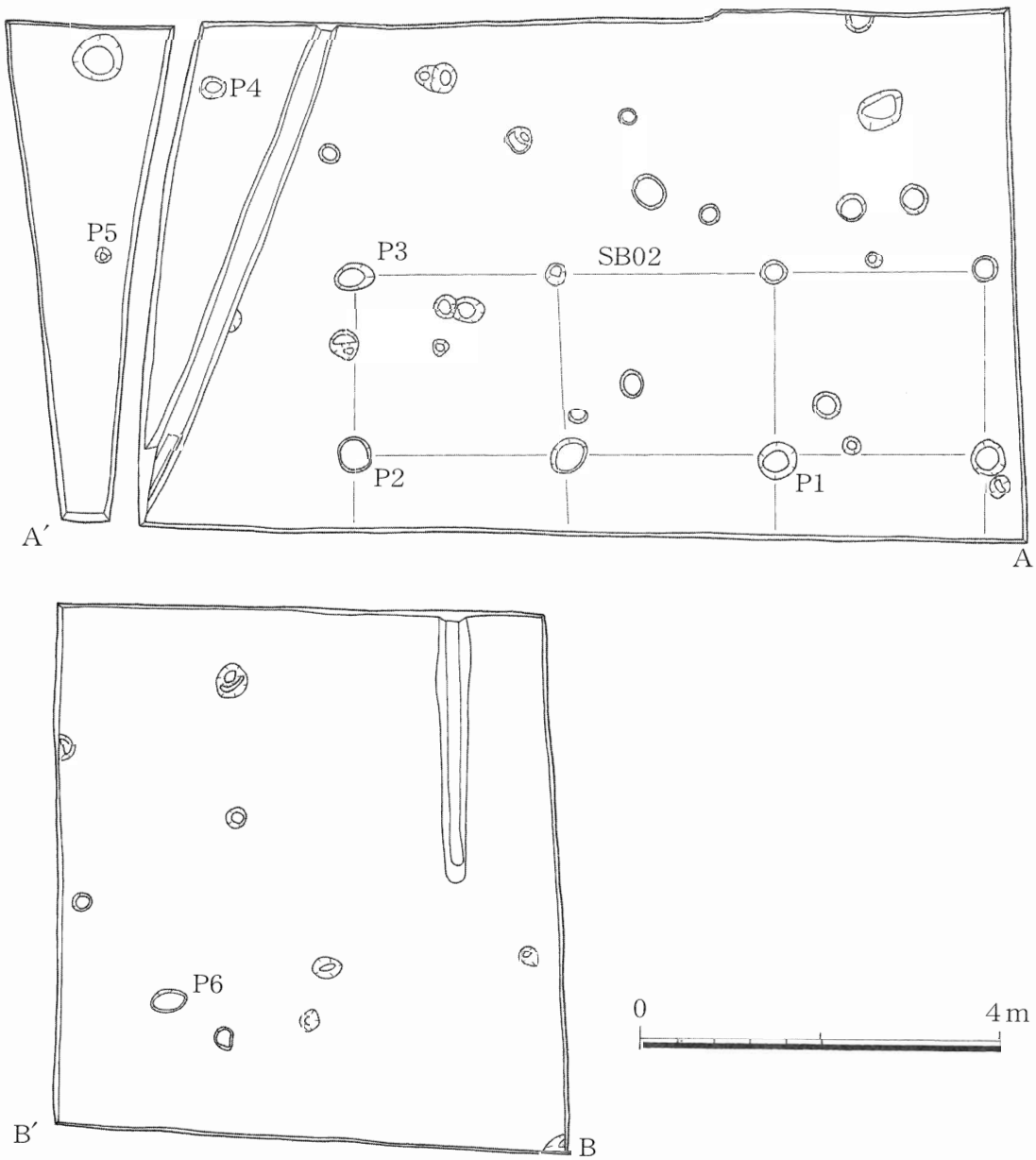
層　序　　５区以南の層序は基本的に同じであり、表土下に灰色粘質土が１層堆積するのみであった（第２２図）。地山は黄褐色粘質土で、遺構は地山に掘り込まれた１面のみである。５区は地表から地山まで１５ｃｍ～２０ｃｍの堆積であった。

遺　構　　ピット群と掘立柱建物跡が１棟、そして排水路が検出された。

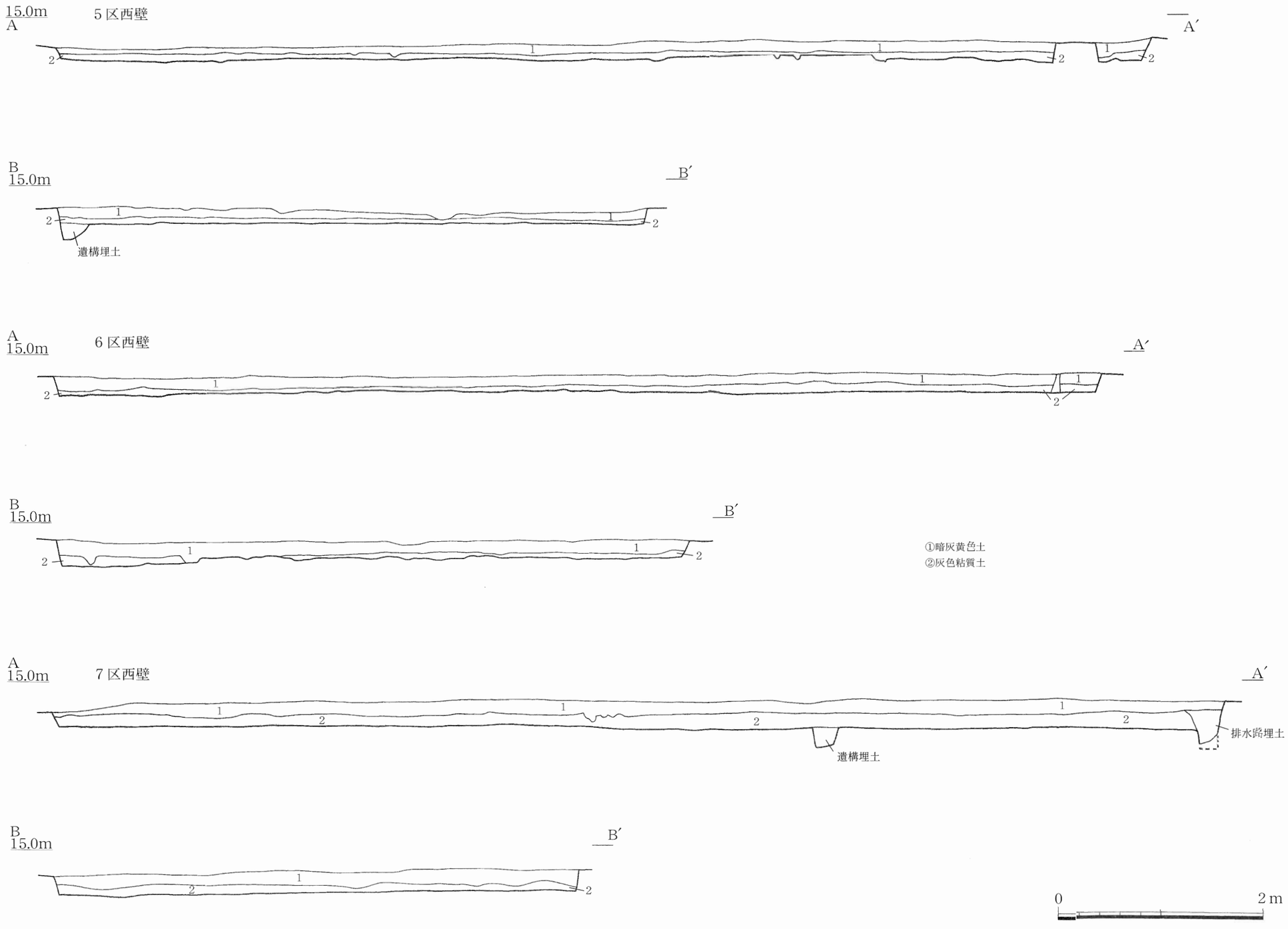
１）掘立柱建物跡（ＳＢ０２）　　調査区のほぼ中央で検出され、規模は３間以上×２間以上と思われる（第２３図）。西側の柱列（ｂ－ｂ´）は直径が約４０ｃｍ、深さは１０～３０ｃｍ、柱間は約２ｍであるのに対し、東側の柱列（ａ－ａ´）は直径２０～４０ｃｍ、深さは５ｃｍ前後と小ぶりで浅いものであった。東側の柱列は柵等であった可能性も考えられる。

また、ＳＢ０２に伴うＰ１、２、３から遺物が出土している。

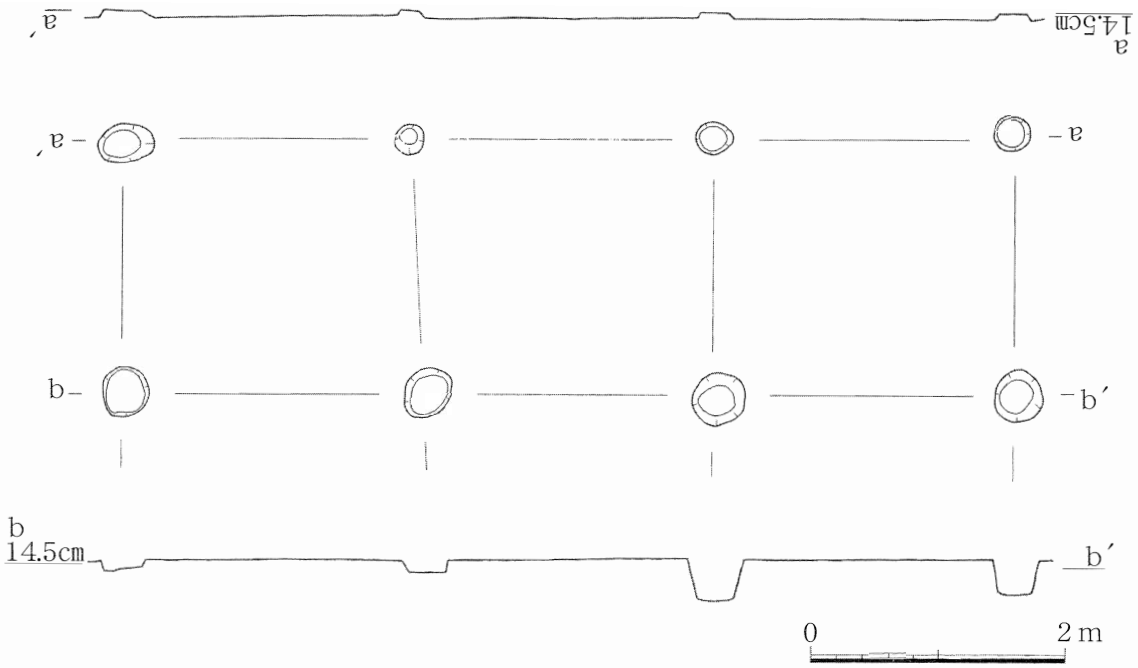
２）ピット群　　調査区の中央から北寄りで多く検出され、南に向かうにつれて、密度は疎になっている。ピットの直径は３０ｃｍ程度、深さは１０～３０ｃｍ程度のものである。



第21図　５区遺構配置図



第22図　5，6，7区西壁土層断面図



第23図　５区ＳＢ02実測図

３）排水路　　調査区の北側に１基と南端に１基、計２基検出されている。北側のものには、２区あるいは３区で述べたように竹が敷き詰められ、それと併用してプラスチック製のパイプが通っていた。

南側の排水路は幅約３０ｃｍで、調査区の東端から３ｍの位置で途切れており、溝内には竹のみが敷かれていた。また、これらの排水路は現在でも機能しており、掘り上げたところ、湧水が認められた。

出土遺物　　第２６図の１はＰ１から出土した弥生土器の壺と思われる。かなり磨滅しているが、外面肩部に４条の沈線が認められる。２、３は土師質土器の皿。２はＰ２から、３はＰ３から出土した。２は回転糸切りによる底部切り離し痕が明瞭に残る。いずれも胎土は精良で、焼成も良好である。４はＰ４から出土した弥生土器の壺と思われ、器壁は０．８ｃｍをはかる。２と比較してしっかりした沈線がめぐる。５はＰ５から出土した低脚杯。脚部は「ハ」の字形にひらき、端部は単純に丸くおさめる。底径は９．０ｃｍをはかり、１～２ｍｍの砂粒を多く含む。６はＰ６から出土した土錘。長さは４．４ｃｍ、幅は１．３ｃｍで、焼成は良好である。

（7） 6区の調査（第２４図）

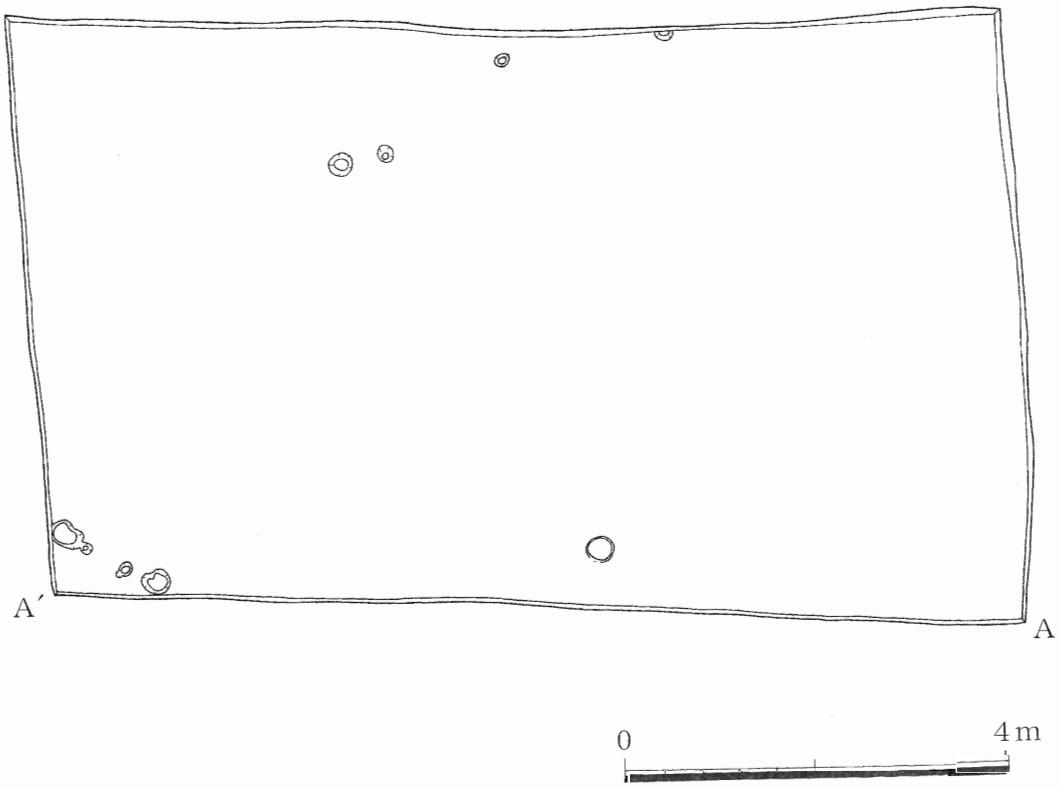
6区以南からは急激に遺構の密度が疎になっている。

層　序　　5区で述べたとおり、表土と灰色粘質土がほぼ水平に堆積する単純な土層堆積であった（第２２図）。遺構面は地山から掘り込まれた１面のみで、地表から地山までの深さは約２０ｃｍである。

遺　構　　ピットが９個確認されているが、大きさはまばらで密度も疎であり、建物を復元することはできなかった。深さは１０ｃｍ程度である。

出土遺物　　6区では遺構内から出土した遺物は皆無であり、包含層中からも小さな破片がわずかしか出土していない。

第２６図の１２は同安窯系青磁の碗である。色調は暗灰緑色を呈し、内外面にクシ状工具による文様が描かれている。



第24図　6区遺構配置図

（8）７区の調査（第２５図）

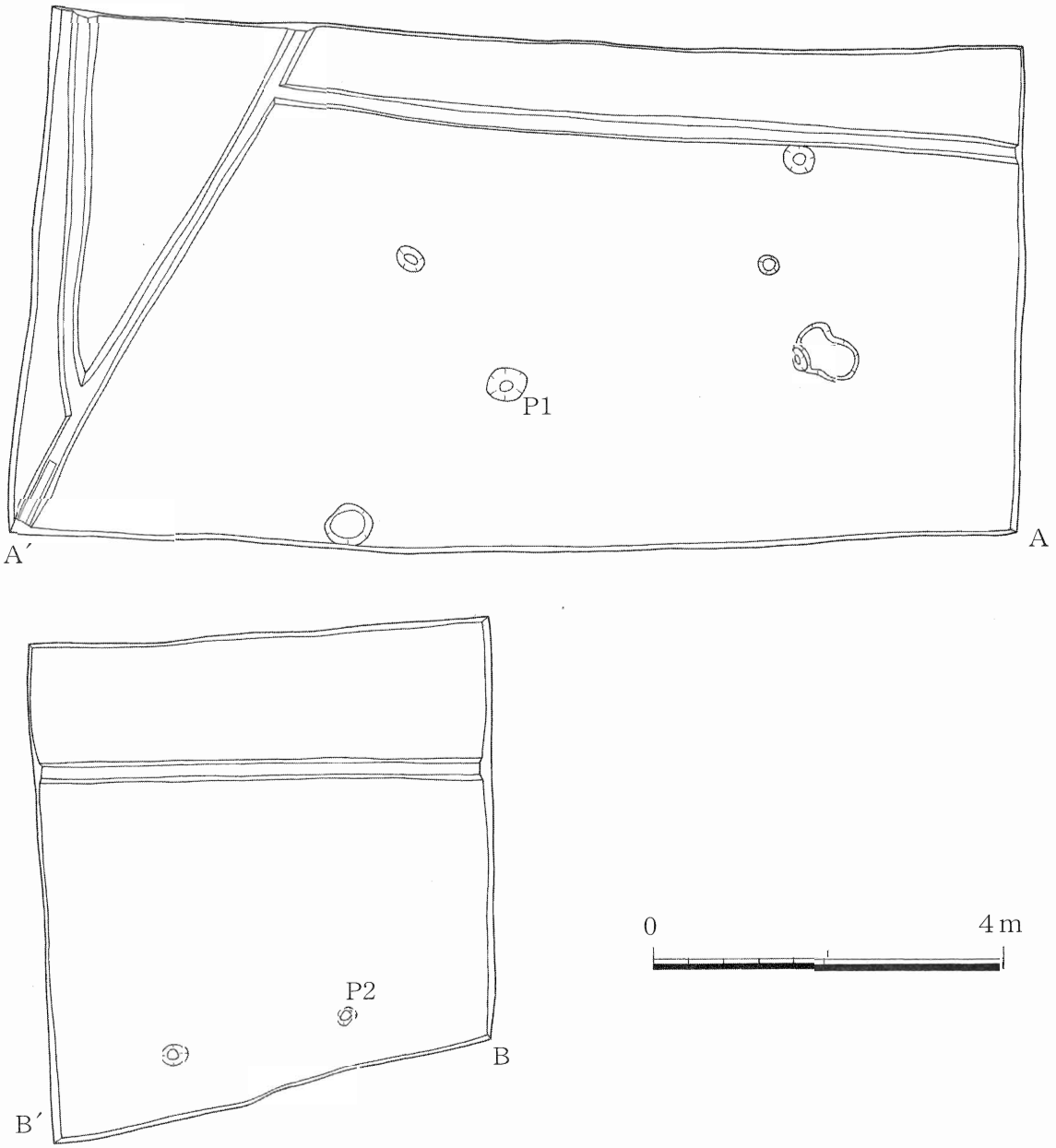
層　序　　表土と灰色粘質土の堆積である。遺構面は地山に掘り込まれた１面のみで、地表から地山までは約３０ｃｍであった（第２２図）。

遺　構　　ピットを８個確認したが、大きさ、並びともにまばらである。深さは約６～２５ｃｍと浅く、削平されたものと思われる。また調査区北側と東側において、木の枝状にはしる竹を敷き詰めた排水路が検出された。

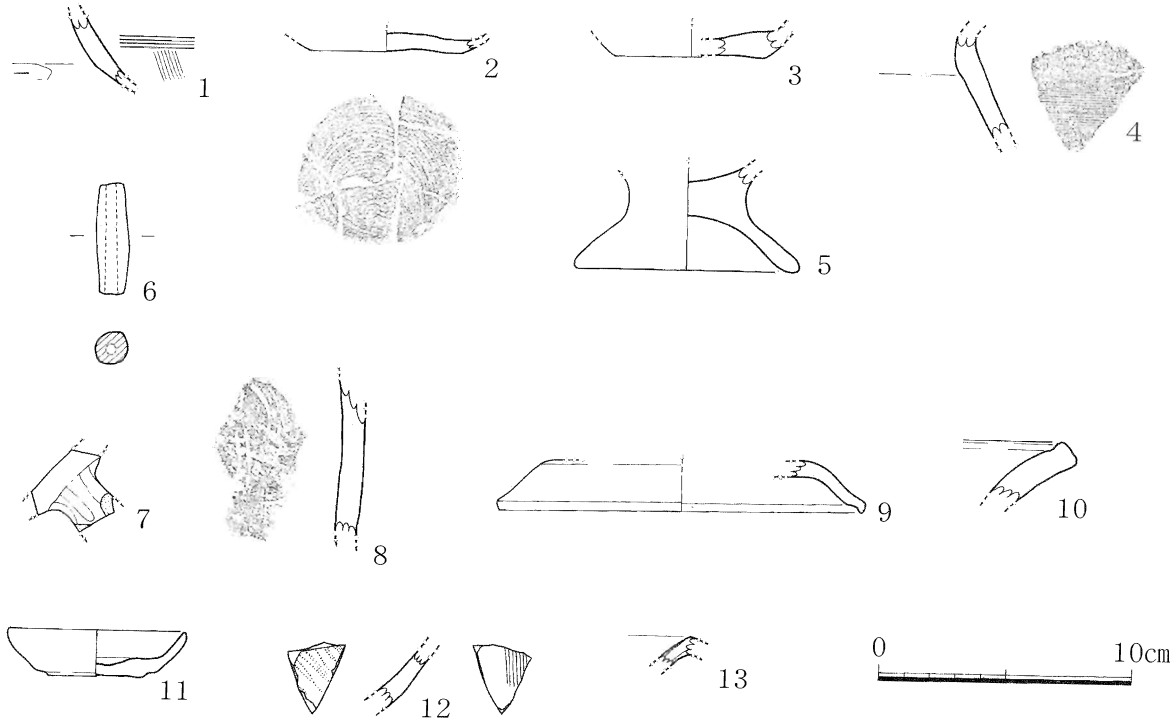
出土遺物　　ピット内から遺物が出土しているが、小片であり磨滅も激しい。

第２６図の７はＰ１から出土した瓦質土器の鍋である。脚部で、ヘラ状工具により整形されている。８はＰ２から出土した須恵器の甕。内外にタタキ目が残るが、磨滅が激しい。

９～１１、１３は遺構外から出土したものである。９、１０は須恵器で９は蓋。１０は甕の口縁部である。口縁は大きく外反し、端部をわずかにつまみあげる。１１は土師質土器の皿。１３は龍泉窯系青磁の皿と思われる。口縁部を外方に折り曲げ、釉が厚くかかる。



第25図　７区遺構配置図



第26図　5，6，7区出土遺物実測図

4．　まとめ

今回の調査では、多数のピットとともに竪穴住居址が１棟と、掘立柱建物跡が２棟発見された。また、出土遺物においていくつかの成果を得ることができた。

３区のＳＩ０１はプランを検出することはできなかったが、その構造は住居址のほぼ中央に炉を据え、柱を４本立てていたことがわかった。時代については床面からの出土遺物が皆無であったことと、炉跡内から出土した遺物も少量で小片であったため断定することはできないが、弥生時代から古墳時代にかけてのものと考えられる。４、５区で検出したＳＢ０１、ＳＢ０２については、いずれも調査区西端で部分的に検出したものであったため、規模等不明な点が多い。ＳＢ０２は柱穴内から遺物も出土しているが、弥生土器と中世の土師質土器であり、かなりの時期幅が認められた。

出土遺物について特筆されるのは、１区において土師器、須恵器が多量に出土したことである。当地域の須恵器編年は大溢遺跡、根ノ木田遺跡において行われており、これと照らし合わせてみると当遺跡出土の須恵器はⅢ期に該当すると思われ、８世紀末～９世紀初頭にあたる。また、２区では中世の陶磁器がまとまって出土した。白磁の玉縁碗が少量出土しているものの、最も多く見られるのは１２世紀後半から１３世紀代のものであった。また朝鮮半島製の陶磁器や東播系須恵器、備前焼のすり鉢等、広域流通品も多く出土している。前述の遺物群を伴った遺構は今回の調査では確認できなかったが、周辺に何らかの建物が存在していたと考えられる。

今回設定した調査区では、地形は北から南に向かって高まっており、４区周辺に最もよく遺構が残っていることが明らかになった。これはもともと高い部分は削平し、低い部分には盛土をして、より平坦な農地を求めた結果であると考えられた。当遺跡の周辺には安富王子台遺跡や羽場遺跡が存在しており、西側には高津川が流れている。高津川の流路と遺跡の立地との関係、言い換えると自然と人々の営みとの関わりを時代の流れを追ってうかがうことのできる地域であり、今後の調査が期待される。

第３表　１区北出土遺物観察表

図版番号	出土地点	種類	器種	法量	調整・技法	色調焼成	胎土	備考
7-1	１区北 遺物包含層	土師器	甕	口径：26.4cm	外面：ナデ 頚部以下：ヘラケズリ	橙褐色	1mm前後の砂粒を 多く含む	
7-2	〃 遺物包含層	〃	〃	口径：23.0cm	外面：タテハケ 頚部以下：ヘラケズリ	黄褐色	1mm前後の砂粒を 多く含む	
7-3	〃 遺物包含層	〃	〃	口径：24.0cm	外面：タテハケ 頚部以下：ヘラケズリ	淡黄褐色	1mm前後の砂粒を 多く含む	
7-4	〃 遺物包含層	〃	〃	口径：25.0cm	外面：タテハケ 頚部以下：ヘラケズリ	淡黄褐色	1mm前後の砂粒を 多く含む	
7-5	〃 遺物包含層	〃	〃		頚部以下：ヘラケズリ	黄褐色	1mm前後の砂粒を 多く含む	
7-6	〃 遺物包含層	〃	〃		頚部以下：ヘラケズリ	淡赤褐色	1～2mmの砂粒を 多く含む	
7-7	〃 遺物包含層	〃	〃	口径：20.8cm	外面：ナデ 頚部以下：ヘラケズリ	淡黄褐色	1mm前後の砂粒を 多く含む	
7-8	〃 遺物包含層	〃	〃	口径：18.2cm	外面：ナデ 頚部以下：ヘラケズリ	淡黄褐色	1mm前後の砂粒を 多く含む	
7-9	〃 遺物包含層	〃	〃		頚部以下：ヘラケズリ	淡黄褐色	1mm前後の砂粒を 多く含む	
7-10	〃 遺物包含層	〃	〃		頚部以下：ヘラケズリ	淡黄褐色	1mm前後の砂粒を 多く含む	
7-11	〃 遺物包含層	〃	〃		頚部以下：ヘラケズリ	淡黄褐色	1mm前後の砂粒を 多く含む	
7-12	〃 遺物包含層	〃	〃		外面：ナデ 頚部以下：ヘラケズリ	淡黄褐色	1mm前後の砂粒を 多く含む	
7-13	〃 遺物包含層	弥生土器		底径：5.0cm	あげ底	橙黄色	1～2mmの砂粒を 多く含む	
8-14	〃 遺物包含層	須恵器	蓋	つまみ径：6.2cm 器高：3.0cm 口径：12.4cm	輪状つまみ 外面：回転ヘラケズリ 内面：ヨコナデ	灰色	1mm前後の砂粒を 少量含む	
8-15	〃 遺物包含層	〃	〃	つまみ径：6.9cm 器高：3.3cm 口径：13.4cm	輪状つまみ 外面：回転ヘラケズリ 内面：ヨコナデ	淡灰色	密	外面に自然釉
8-16	〃 遺物包含層	〃	〃	つまみ径：7.2cm 器高：3.1cm 口径：13.0cm	輪状つまみ 外面：回転ヘラケズリ 内面：ヨコナデ	灰色	密	
8-17	〃 遺物包含層	〃	〃	つまみ径：7.4cm 器高：2.6cm 口径：14.2cm	輪状つまみ 外面：回転ヘラケズリ 内面：ヨコナデ	褐灰色	密	
8-18	〃 遺物包含層	〃	〃	つまみ径：7.4cm 器高：2.6cm 口径：14.9cm	輪状つまみ 外面：回転ヘラケズリ 内面：ヨコナデ	青灰色	白色粒子を少量 含む	
8-19	〃 遺物包含層	〃	〃	口径：17.2cm		淡灰色	白色粒子を多く 含む	
8-20	〃 遺物包含層	〃	〃	口径：13.6cm	外面：回転ヘラケズリ 内面：ヨコナデ	灰色	白色、黒色粒子を 多く含む	
8-21	〃 遺物包含層	〃	坏身	底径：8.4cm	底部：ヘラギリ 高台端部に凹線	青灰色	1～2mm前後の砂粒 を多く含む	
8-22	〃 遺物包含層	〃	〃	底径：8.0cm	底部：ヘラギリ	暗灰色	白色粒子を多く 含む	
8-23	〃 遺物包含層	〃	〃	底径：7.8cm		灰白色	白色粒子を多く 含む	
8-24	〃 遺物包含層	〃	〃	底径：7.6cm		淡灰色	白色粒子を多く 含む	
8-25	〃 遺物包含層	〃	〃	底径：8.6cm		灰色	白色粒子を多く 含む	

8-26	〃 遺物包含層	〃	〃	底径：8.6cm		暗灰色	白色粒子を多く含む	
8-27	〃 遺物包含層	〃	〃	底径：8.2cm		青灰色	白色粒子を多く含む	
8-28	〃 遺物包含層	〃	〃	底径：7.0cm		暗灰色	白色粒子を多く含む	
8-29	〃 遺物包含層	〃	〃	口径：11.7cm 器高：4.6cm 底径：8.0cm		青灰色	白色粒子を多く含む	
8-30	〃 遺物包含層	〃	〃	底径：10.8cm		暗灰色	白色粒子を多く含む	
8-31	〃 遺物包含層	〃	〃	口径：14.2cm		暗灰色	白色粒子を多く含む	
8-32	〃 遺物包含層	〃	〃	口径：11.6cm 器高：3.2cm 底径：8.4cm	内外面ともナデ	淡青灰色	白色粒子を多く含む	
8-33	〃 遺物包含層	〃	甕	不明	外面：格子タタキ 内面：同心円タタキ	青灰色	白色粒子を多く含む	
8-34	〃 遺物包含層	〃	壺	不明	内面：ヨコナデ	淡灰色	白色粒子を多く含む	

第4表　1区南出土遺物観察表

図版番号	出土地点	種類	器種	法量	調整・技法	色調焼成	胎土	備考
9-1	1区南 シルト層	縄文土器	鉢		条痕文	灰茶褐色	1mm前後の砂粒を多く含む	
9-2	〃 シルト層	土師器	甕	口径：24.2cm	外面：タテハケ 内面：ヘラケズリ	暗茶褐色	1mm前後の砂粒を多く含む	
9-3	〃 シルト層	〃	〃	口径：19.2cm	外面：タテハケ 内面：ヘラケズリ	灰褐色	1～2mmの砂粒を多く含む	
9-4	〃 シルト層	〃	〃		外面：ナデ 内面：ヘラケズリ	淡黄褐色	1mm前後の砂粒を多く含む	
9-5	〃 シルト層	〃	〃	口径：30.6cm	外面：ナデ 内面：ヘラケズリ	灰橙褐色	1mm前後の砂粒を多く含む	
9-6	〃 シルト層	〃	〃	口径：25・6cm	外面：ナデ 内面：ヘラケズリ	淡橙褐色	1～2mmの砂粒を多く含む	
9-7	〃 シルト層	〃	〃	口径：24.6cm	外面：ナデ 内面：ヘラケズリ	明橙褐色	1～2mmの砂粒を多く含む	
9-8	〃 シルト層	〃	〃	口径：25.4cm	外面：ナデ 内面：ヘラケズリ	灰黄褐色	1～2mmの砂粒を多く含む	
9-9	〃 シルト層	須恵器	蓋	口径：12.4cm		不良	1mm前後の砂粒を少量含む	
9-10	〃 シルト層	〃	杯	口径：12.6cm 器高：4.7cm 底径：6.6cm		不良	精良	
9-11	〃	弥生土器	甕		二重口縁	灰黄褐色		
9-12	〃	白磁	碗	底径：4.8cm		青味がかった透明釉		

第５表　２区出土遺物観察表

図版番号	出土地点	種類	器種	法量	調整・技法	色調焼成	胎土	備考
12-1	２区北	黒曜石	石鏃	長さ：2.9cm 幅　：　2.2cm 厚さ：0.4cm	凹基無茎式			
12-2	〃	〃	剥片					
12-3	〃	〃	〃					
12-4	２区南	〃	〃					
12-5	２区北		石錘	長さ：7.1cm 幅　：　5.3cm 厚さ：1.6cm	両端に刳り込みあり			
13-1	〃	縄文土器	鉢		外面口縁下に突帯	黄褐色	２㎜前後の砂粒を多く含む	
13-2	〃	〃	〃			淡黄褐色	１㎜前後の砂粒を多く含む	
13-3	〃	弥生土器	〃		口縁端部に２条の沈線	淡黄褐色	２㎜前後の砂粒を多く含む	
13-4	〃	〃	甕	底径：8.6cm	平底	淡橙色	1～2㎜の砂粒を多く含む	
13-5	〃	〃	〃		底部	淡橙色	1㎜前後の砂粒を多く含む	
13-6	〃	〃	〃	底径：8.4cm	上げ底	黄褐色	1㎜前後の砂粒を多く含む	
13-7	〃	土師器	〃	口径：21.0cm	口縁部	淡橙色	１㎜前後の砂粒を多く含む	
13-8	〃	〃	〃		外面胴部に波状文	淡橙黄色	１㎜前後の砂粒を多く含む	
13-9	２区南	須恵器	蓋			淡灰色	密	
13-10	２区北	〃	〃	口径：11.6cm		淡灰色	精良	
13-11	〃	〃	坏身	底径：9.0cm		灰色	密	
13-12	〃	〃	〃	口径：13.0cm 器高：4.3cm 底径：7.8cm	回転糸切	暗灰色	白色粒子を多く含む	
13-13	〃	〃	壺	底径：9.0cm	ロクロナデ	暗灰色	1㎜前後の砂粒を少量含む	
13-14	〃	〃	甕		外面：格子タタキ 内面：同心円タタキ	淡灰色	白色粒子を多く含む	
13-15	〃	土師質土器	杯	口径：14.0cm	ロクロナデ	淡橙色	精良	
13-16	〃	〃		口径：14.0cm	ロクロナデ	淡橙黄色	精良	
13-17	〃	瓦質土器	すり鉢			灰褐色	微砂粒を少量含む	
13-18	〃	備前焼系	〃			灰色	黄褐色粒子多く含む	
13-19	２区南	中世須恵器	鉢		東播系	淡灰色	白色粒子を多く含む	
13-20	２区北		土錘	長さ：3.7cm 幅：1.1cm	径3㎜の孔	灰黄褐色	微砂粒をわずかに含む	

13-21	〃	白磁	碗		玉縁状口縁	白色		
13-22	〃	〃	皿		口縁端部の釉を剥ぐ 内面体部に文様	灰色がかった 透明釉		
13-23	〃	〃	〃	口径：11.0cm	口縁端部の釉を剥ぐ			
13-24	〃	〃	〃	底径：5.6cm	外面体部下半は釉が かからない	灰白色		
13-25	〃	〃	壺	底径：10.0cm		灰白色		
13-26	〃	青磁	碗		内面にヘラ彫り文様	緑灰色		
13-27	〃	〃	〃		外面に鎬蓮弁文	灰緑色		
13-28	〃	〃	〃		外面に蓮弁文	暗緑色		
13-29	〃	〃	〃		ヘラ彫り	緑灰色		
13-30	〃	〃	〃		外面口縁下に3条の 沈線	淡灰緑色		
13-31	２区南	〃	皿	底径：4.6cm	同安窯系	暗灰緑色		
13-32	２区北	〃	〃	口径：9.2cm	同安窯系	灰色		
13-33	〃	〃	香炉			緑灰色		
13-34	〃	青白磁	合子			青味がかった 透明		
13-35	〃	染付	碗		口縁を外反させる			
13-36	〃	施釉陶器	壺					
13-37	２区南	〃	碗	口径：17.0cm	刷毛目	暗灰色		
13-38	２区北	染付	皿	底径：5.2cm	肥前系磁器			

第６表　３区出土遺物観察表

図版番号	出土地点	種類	器種	法量	調整・技法	色調焼成	胎土	備考
14-1	３区北 炉跡内	土師器	甕			淡橙色	微砂粒を多く含む	
14-2	〃 炉跡内	〃	〃		外面：ハケ目	淡黄褐色	1mm前後の砂粒を 多く含む	
17-1	３区南 ＳＫ０１	弥生土器	〃	口径：19.4cm		淡黄褐色	1～2mmの砂粒を 多く含む	
17-2	３区南	土師器	〃	口径：12.0cm	ナデ	淡橙色	1mm前後の砂粒を 含む	
17-3	〃	白磁	碗		玉縁状口縁	乳白色		
17-4	〃	〃	皿		口縁端部の釉をはぐ	灰白色		
17-5	〃	青磁	碗		同安窯系	淡緑灰色		

第７表　４区出土遺物観察表

図版番号	出土地点	種類	器種	法量	調整・技法	色調焼成	胎土	備考
17-6	４区北 Ｐ１	須恵器	蓋		輪状つまみ	淡灰色	精良	
17-7	４区南	土師器	甕	口径：13.5cm	二重口縁	淡黄褐色	微砂粒を少量含む 多く含む	
17-8	４区北	青磁	碗		細線蓮弁文	暗緑色		
17-9	〃		土錘	長さ：4.1cm 幅：1.3cm	径4mmの孔	淡橙灰白色		
17-10	〃	瓦質土器	鍋		外面：格子タタキ 内面：ハケ	暗灰色	精良	

第８表　５区出土遺物観察表

図版番号	出土地点	種類	器種	法量	調整・技法	色調焼成	胎土	備考
26-1	５区北 Ｐ１	弥生土器	壺		外面：沈線、タテハケ	淡黄褐色	1mm前後の砂粒を 多く含む	
26-2	〃 Ｐ２	土師質土器	皿	底径：5.8cm	底部：回転糸切り	橙色	精良	
26-3	〃 Ｐ３	〃	〃	底径：6.0cm		淡黄褐色	精良	
26-4	〃 Ｐ４	弥生土器	壺		外面：沈線	淡灰褐色	微砂粒を含む	
26-5	〃 Ｐ５	弥生土器	低脚杯					
26-6	５区南 Ｐ６		土錘	長さ：4.4cm 幅：1・3cm	径4mmの孔	橙灰白色	精良	

第９表　６，７区出土遺物観察表

図版番号	出土地点	種類	器種	法量	調整・技法	色調焼成	胎土	備考
26-7	７区北 Ｐ１	瓦質土器	鍋			淡灰色	1mm前後の砂粒を 少量含む	
26-8	７区南 Ｐ２	須恵器	甕		外面：平行タタキ 内面：同心円タタキ	灰白色	精良	摩滅が激しい
26-9	７区北	〃	蓋	口径：14.4cm		灰色	白色、黒色粒子を 多く含む	
26-10	〃	〃	甕			淡灰色	精良	
26-11	〃	土師質土器	皿	口径：7.0cm 器高：1.8cm 底径：3.8cm		灰白色	精良	
26-12	６区北	青磁	碗		同安窯系	暗灰緑色		
26-13	７区北	〃	皿		釉が厚くかかる			

中小路遺跡　　地形・地質的立地

中村　唯史（島根県立三瓶自然館）

１．周辺の地形・地質概要

中小路遺跡は、西中国山地から流れ出る高津川の下流に発達する沖積平野（横田盆地）に立地している（第２７図）。この平野の南で高津川は支流の匹見川と合流し、合流点の下流側で「コ」の字型に時計回りに大きく曲流している。横田盆地は曲流の内側に形成された堆積面である。

横田盆地の周囲は、標高１００～２００ｍのごくなだらかな丘陵地が広がっている。この丘陵地は、益田市の海岸部に広く分布する都野津層（新第三紀末～第四紀更新世）の堆積時に形成された地形面で、都野津面と呼ばれることがある。当地付近は、都野津層分布の南端にあたり、都野津層は尾根部を中心に分布し、その下位には新第三紀の川合・久利層、中生代ジュラ紀の樋口層、母岩の形成が古生代にさかのぼる三郡変成岩類が分布している。横田盆地の地表部は大部分が完新世の堆積物で構成されているが、一部に更新世の段丘堆積物が分布している可能性がある。

横田盆地を形成した高津川は、六日市町に流れを発する河川である。大規模ダムがひとつもない全国唯一の一級河川として知られる清流で、急峻な西中国山地から流れ出るために勾配が大きい急流である。高津川は、横田盆地南部で支流の匹見川と合流する。匹見川は本流に次ぐ規模を持ち、本流以上に急流である。そのため、横田盆地の形成に匹見川による堆積作用が与えた影響は本流に劣らず大きいと思われる。

２．横田盆地の形成

横田盆地は、高津川の曲流部にφ２０～１０ｃｍの礫を主体とする河川堆積物が堆積して形成された沖積平野である。曲流部は「コ」の字型に西に突出した形状をしていて、このような曲流は断層を伴う構造運動によって形成された可能性がある。空中写真（図版１）から当地の地形を見ると、右岸の丘陵に南北方向の線構造（第２７図中の破線部）が認められ、この線構造は基盤の地質分布とも調和的であることから断層の可能性があり、曲流と関係していることが予想できる。ただし、この構造運動は横田盆地の形成よりずっと古い時代の現象である。

第27図　横田盆地周辺の地質分布と切峰面等高線

切峰面等高線は幅５００ｍ以下の谷を埋める谷埋め法によって作成したもので、通常の等高線に比べて地形の面的分布が強調されている。地質分布は、新編島根県地質図編集委員会（１９９７年）を簡略化した。

地形面の形成についてみると、沖積平野とは時代的には最終氷期最盛期（１．６～２万年前）以降の堆積物によって構成された地形である。その形成は世界的な気候変動によるもので、氷期中は海面が大きく低下していたために特に下流域で河川の浸食営力が増大し、

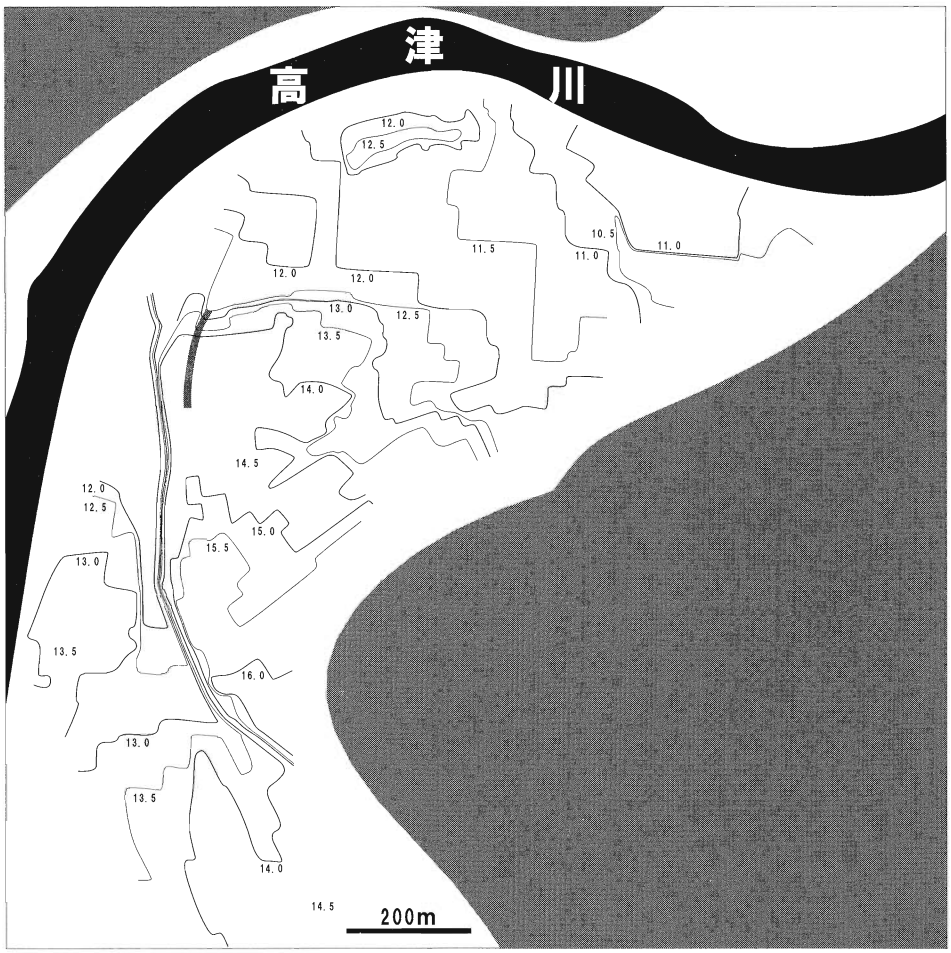
現在の平野面より深い谷が形成されていた。最終氷期が終わった１万年前以降、海面上昇に伴って侵食営力が低下し、土砂の堆積によって氷期の谷が埋積されて沖積平野が発達した。横田盆地の場合も、最終氷期中には現在より低い位置を川が流れ、氷期以降に谷が埋積されて堆積面が形成されたものである。

３．盆地の微地形と遺跡の立地

横田盆地は上流（南）側では旧河道とそれに伴う微高地列が明瞭に認められるのに対し、下流（北）側ではそれらの微地形が不明瞭となる。その境界は比高２～３ｍの小崖として明瞭に認められ、中小路遺跡から安富遺跡の一帯は周囲に比べて若干高い微高地面を構成している（第２８図）。

この違いが生じた理由として、上流側は高津川と匹見川の氾濫時にはその影響を直接受けることから、河道変遷が繰り返されたのに対し、下流側は尾根の突出部の影になることから氾濫の影響が少なく、比較的古い時期に形成された堆積面が残されたと考えられる。

中小路遺跡は微高地の下流側端部にあり、今回調査区の北端（１区）では微高地の先端が侵食されてできた小崖が埋没地形として確認された。今回の発掘調査では、微高地面の堆積時期を示す資料は得られていないが、微高地面を構成する礫の表面は、遺物・遺構を伴う時期の堆積物に比べて明らかに風化が進んでおり、かなり時期差があることは確実である。比高がそれほど大きくないことから沖積段丘と思われるが、更新世の段丘の可能性もある。いずれにしても、この微高地は盆地内では古い時期の地形面で、比較的安定した場所だったといえる。



第28図　横田盆地北部の微地形図

県営担い手育成基盤整備事業に伴って作成された地形図の標高データを元に作成したもので、数字は標高（m）を示す。微高地と現氾濫原との境界にあたる南北方向の小崖を認めることができる。太線で示した部分は中小路遺跡の調査区。

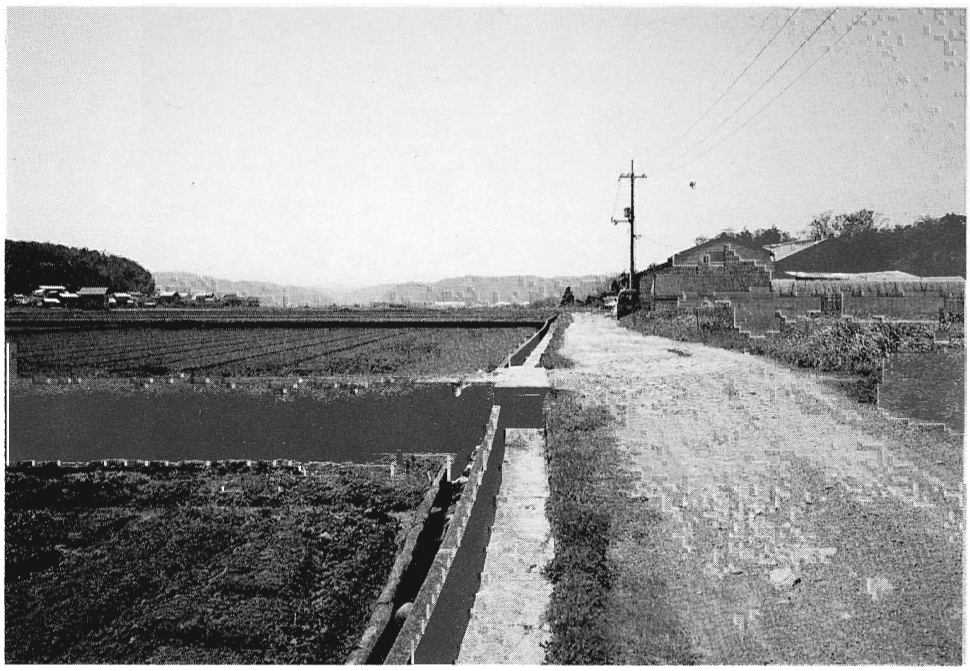
写　真　図　版

図版 1

昭和22年米極東空軍撮影空中写真

図版 2

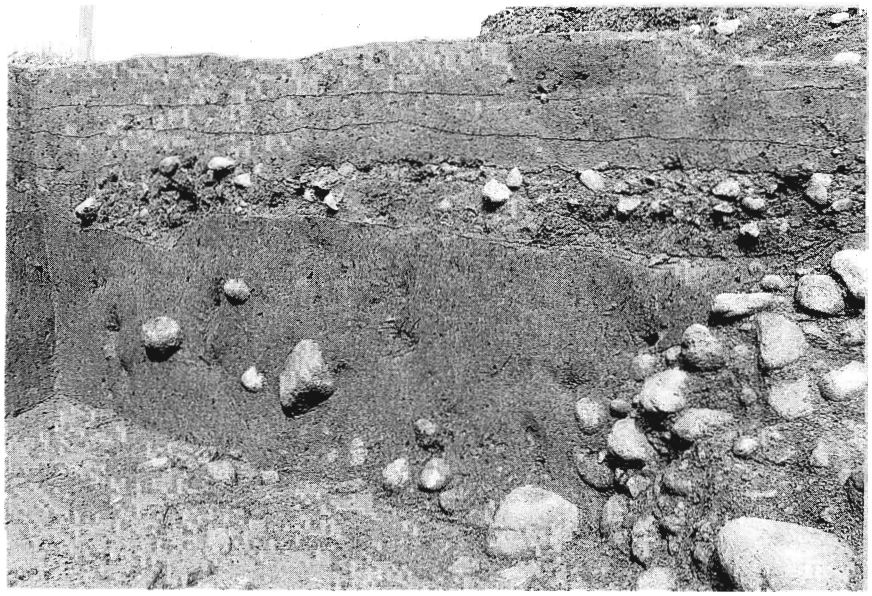
旧 中小路集落を望む



中小路遺跡調査前

1 区 完掘状況

川岸状地形検出状況



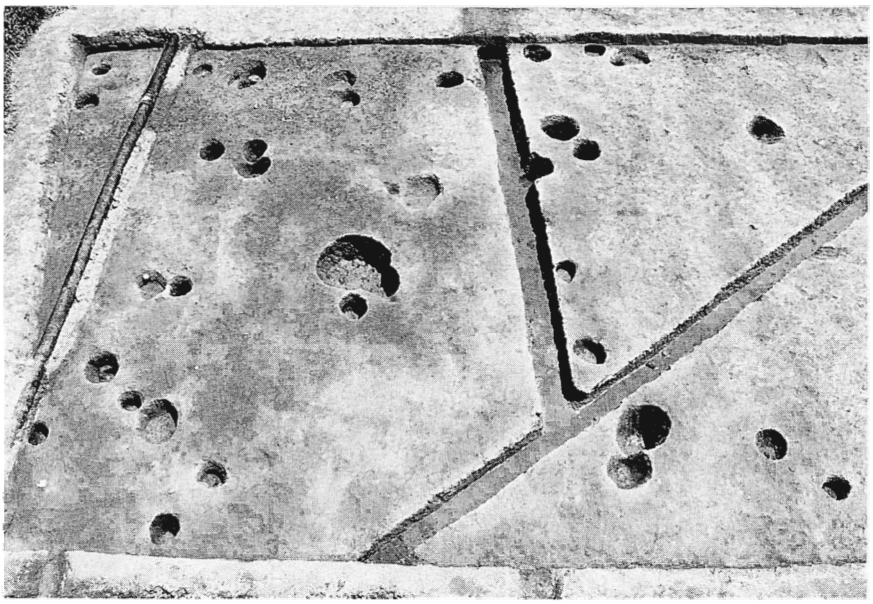
遺物包含層堆積状況

図版 4

1 区 ピット完掘状況

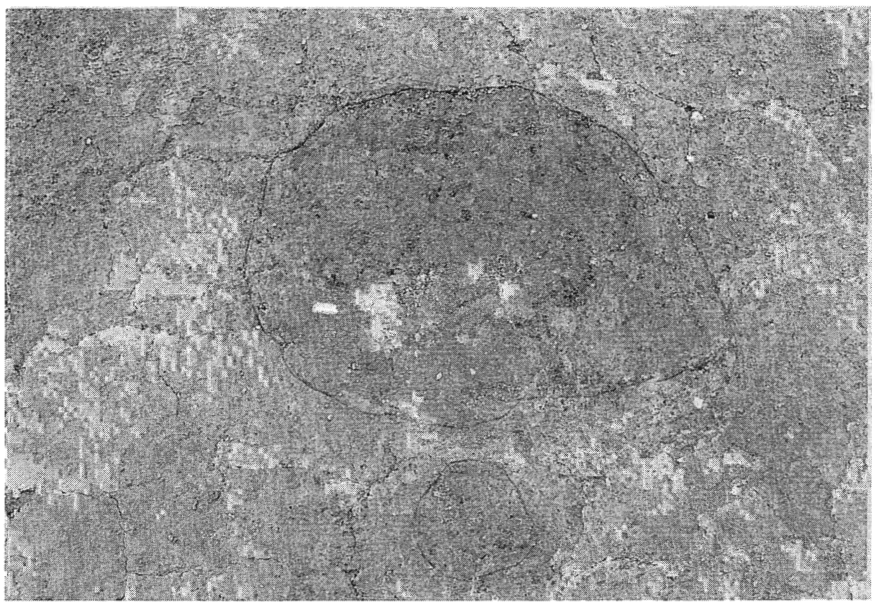
2 区 完掘状況

2 区 ピット検出状況



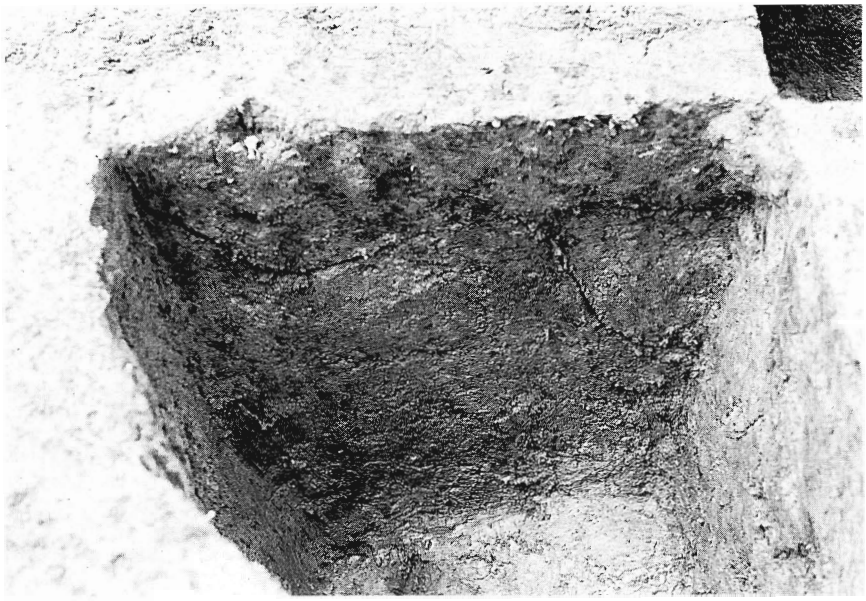
3 区北 完掘状況

竪穴住居跡（東から）

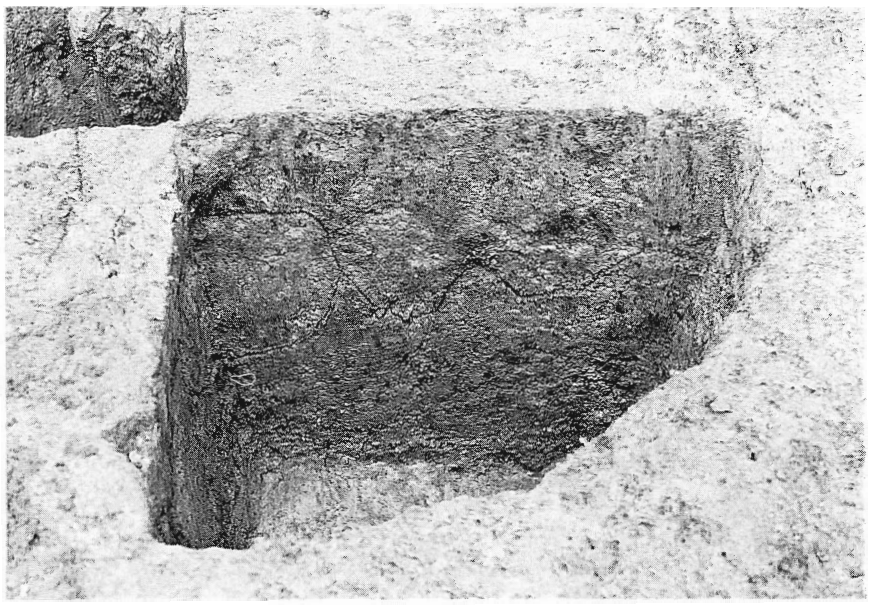


炉跡検出状況

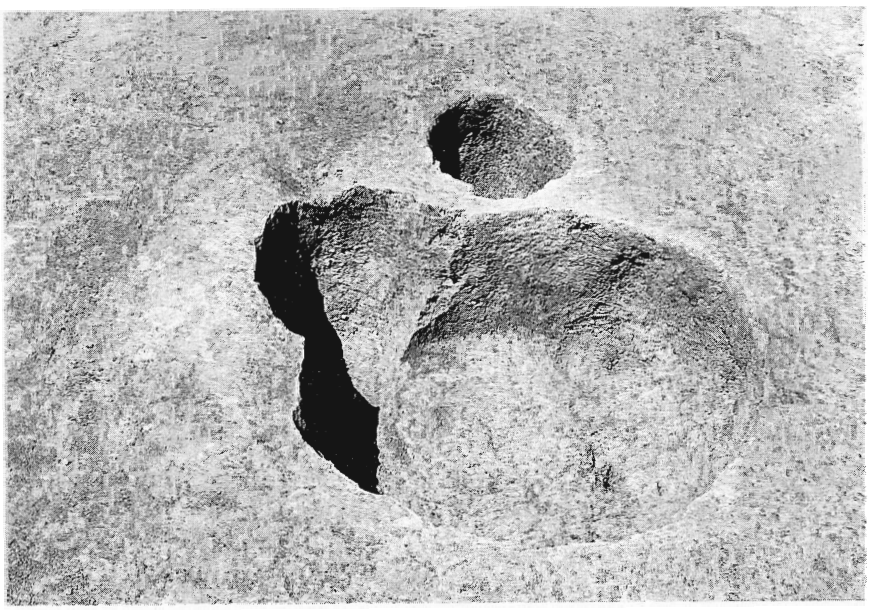
図版 6



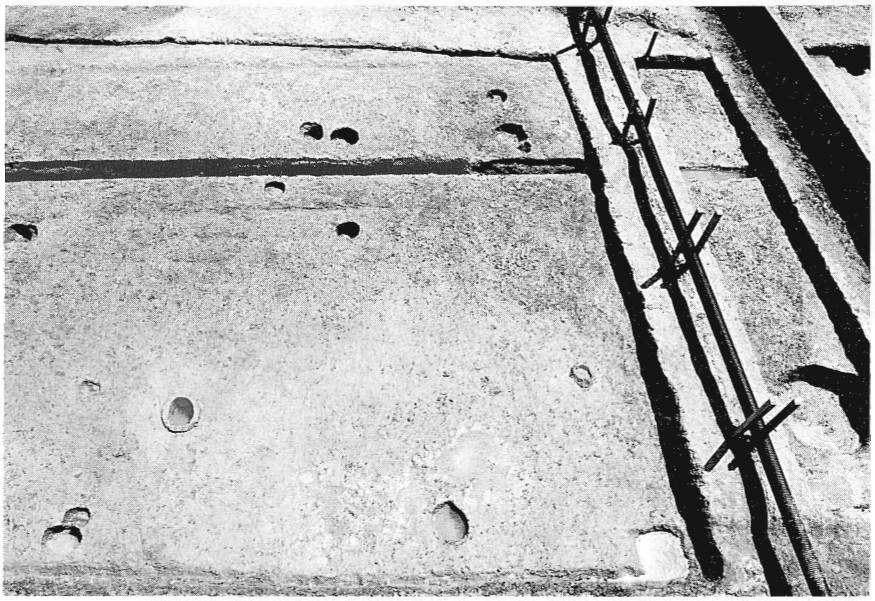
炉跡内土層堆積状況
（北から）



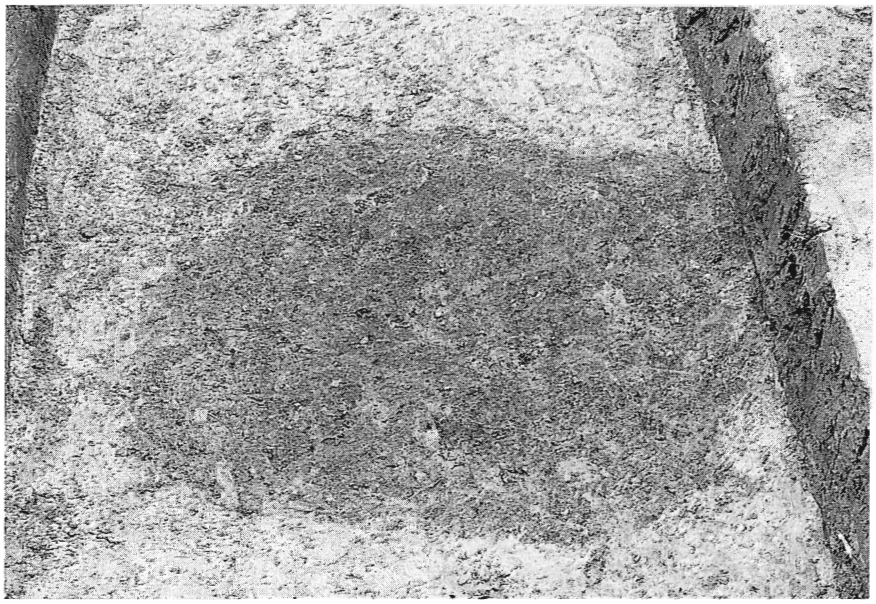
炉跡内土層堆積状況
（東から）



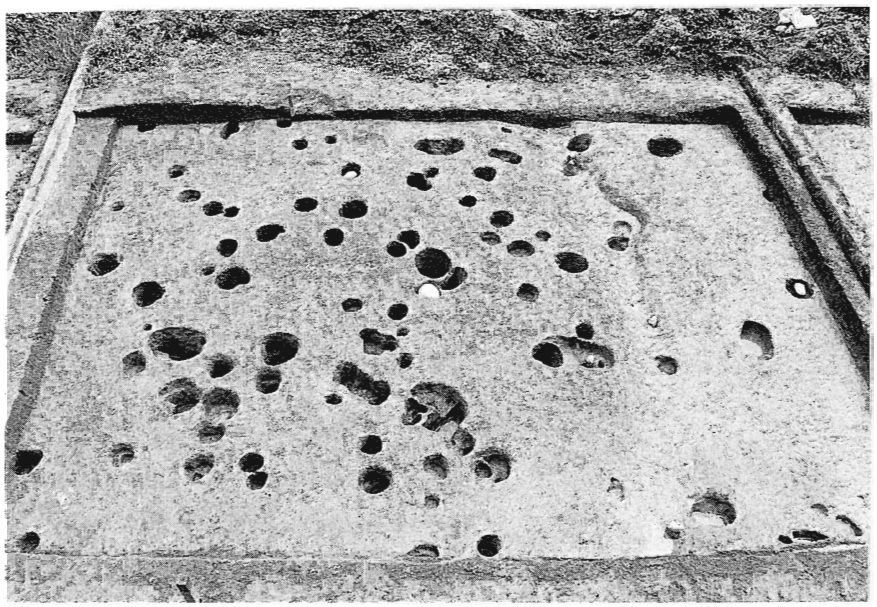
炉跡完掘状況



3 区南 完掘状況



ＳＫ０１検出状況

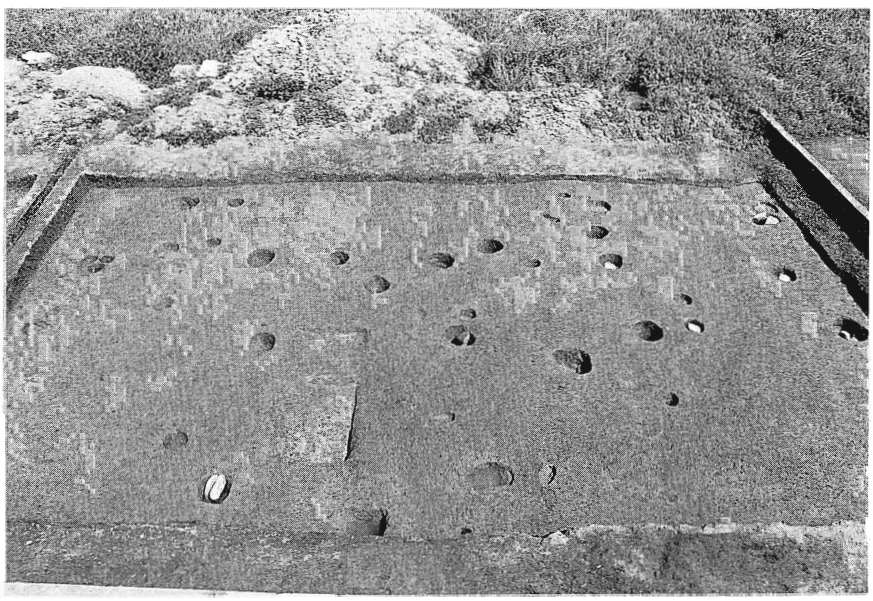


4 区北 完掘状況

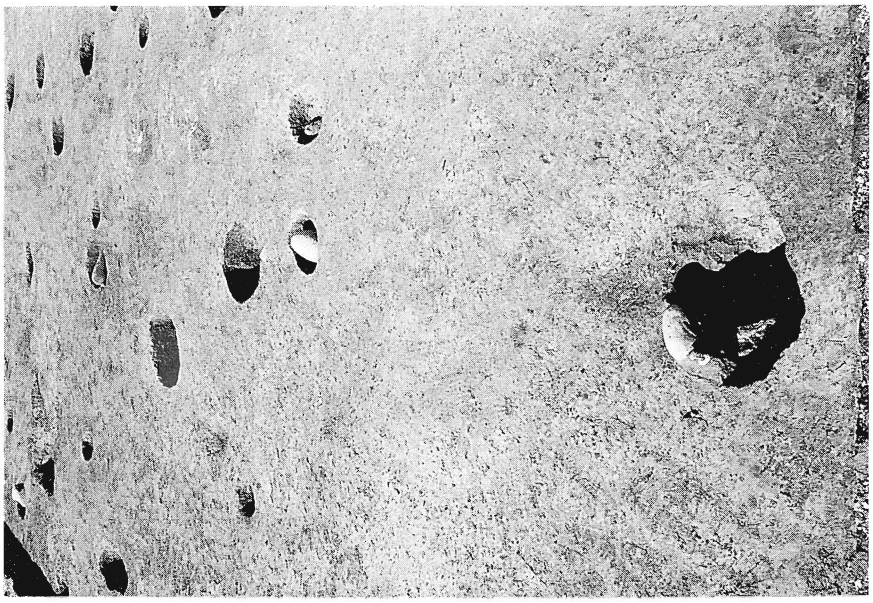
図版 8

4 区北 ピット完掘状況

柱痕残存状況



4 区南 完掘状況

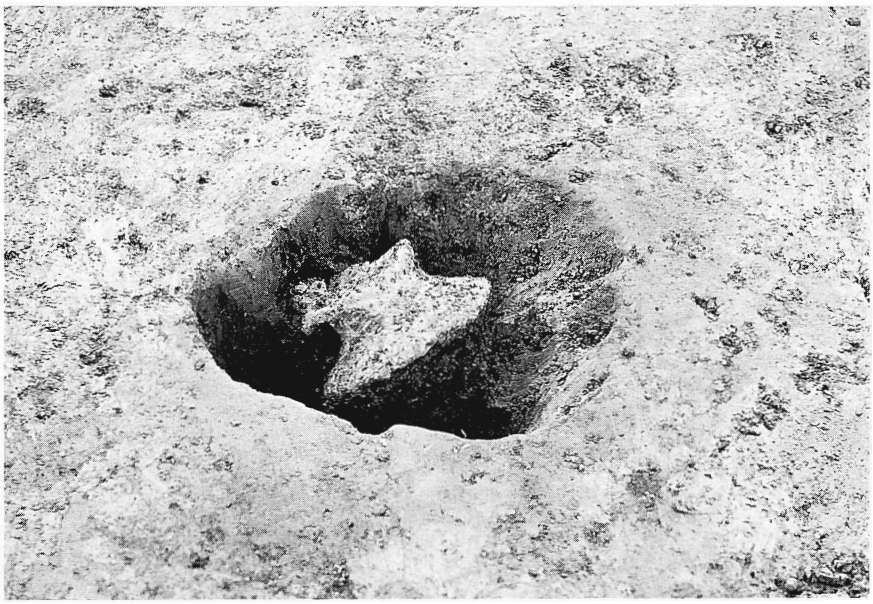


4 区南 ピット完掘状況

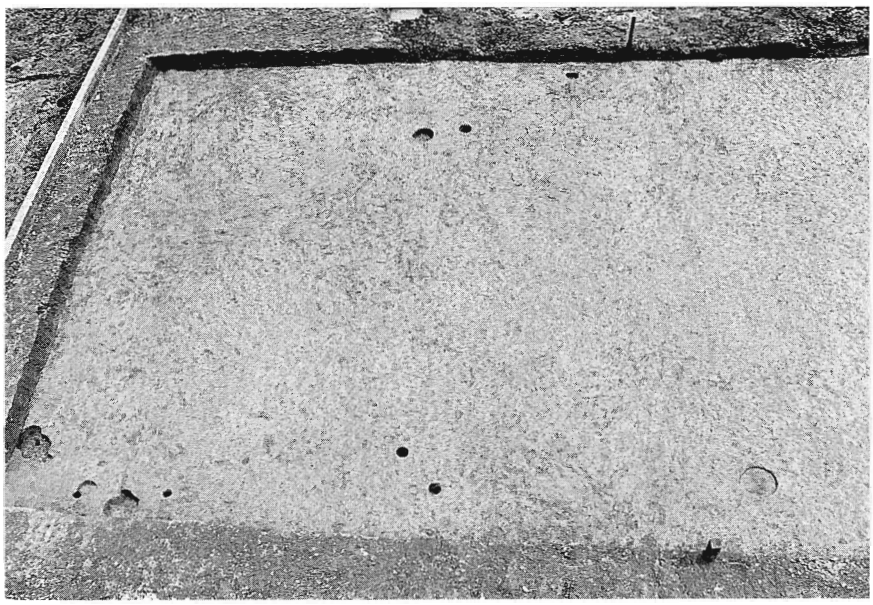
5 区北 完掘状況

5 区南 完掘状況

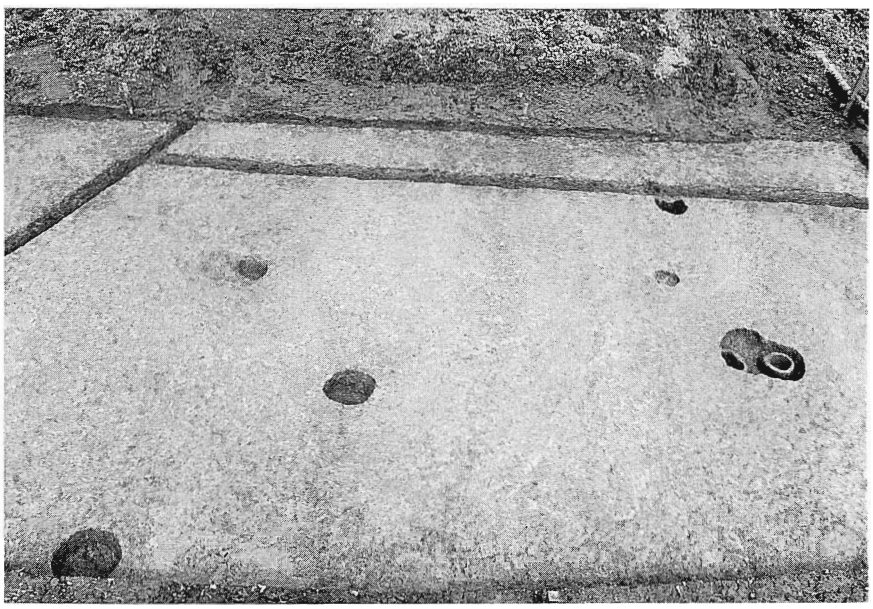
図版10



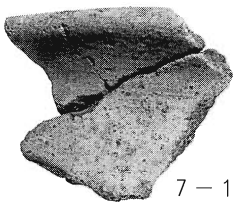
5区 遺物出土状況



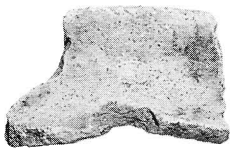
6区北 完掘状況

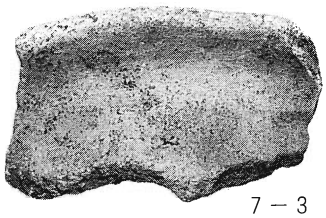


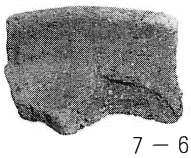
7区北 完掘状況

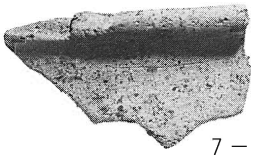

7－1

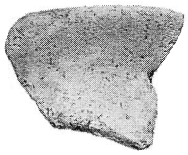
7－2

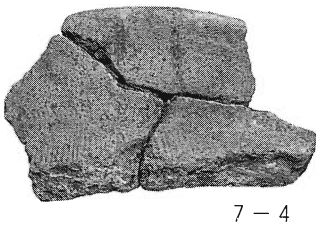

7－5

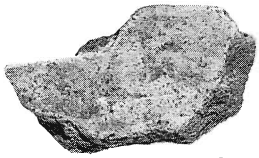

7－3

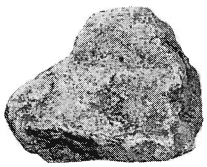

7－6


7－7


7－8

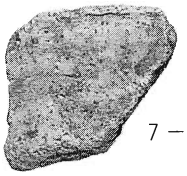

7－4

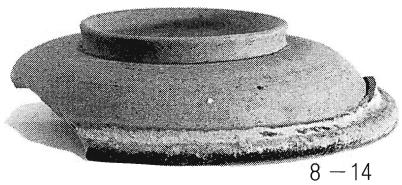

7－9

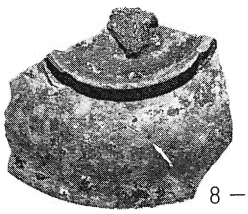

7－10

7－13

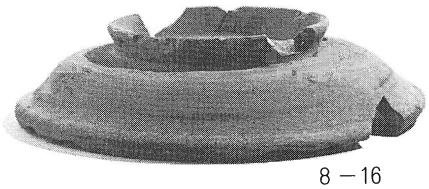
7－11

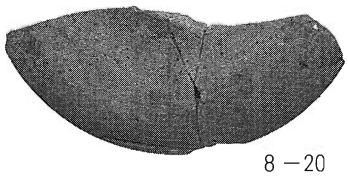

7－12

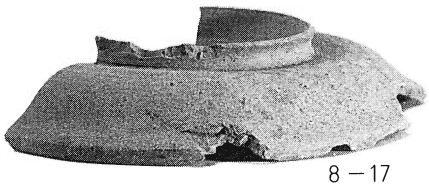

8－14

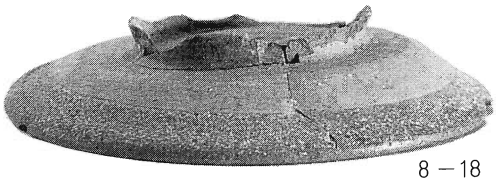

8－15

8－19


8－16


8－20

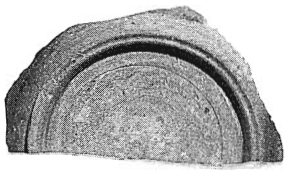

8－17

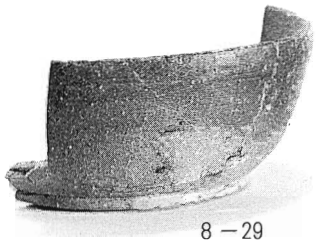

8－18

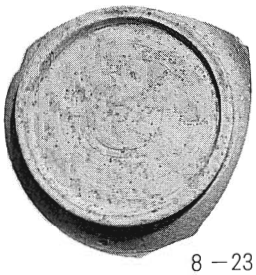
1区　出土遺物（1）

図版12

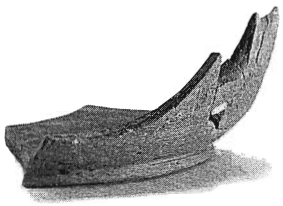
8－21


8－22

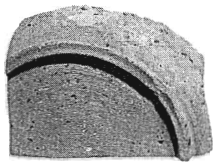

8－29


8－23

8－24

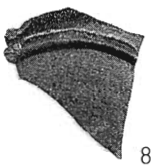

8－27

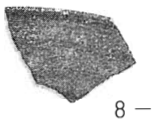
8－26

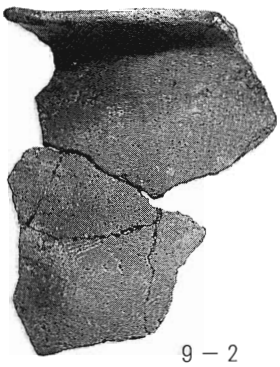

8－25

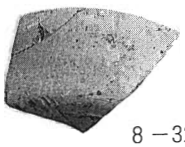
8－34

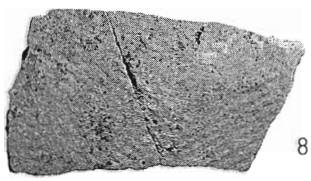
8－28

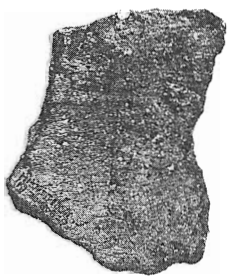

8－30

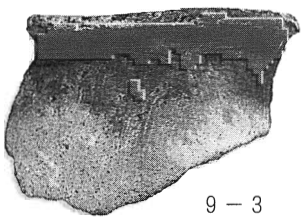

8－31


9－2

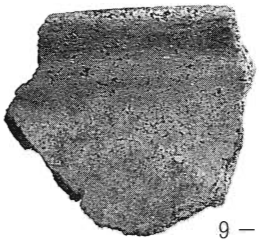

8－32

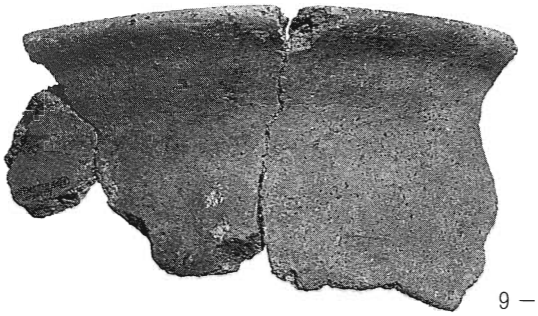

8－33


9－1


9－3

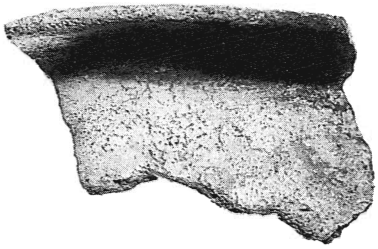
1区　出　土　遺　物　(2)


9－4


9－5

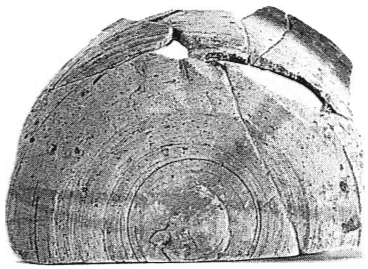
9－11

9－6

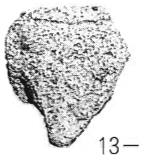

9－8

9－12

9－7


9－10

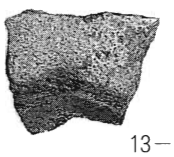
13－1

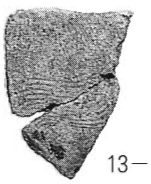

13－2

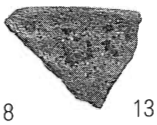
13－3

13－5

13－4


13－6


13－8

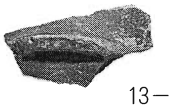

13－7

1区および2区　出　土　遺　物

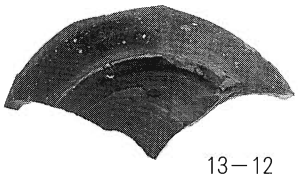
図版14

13－9

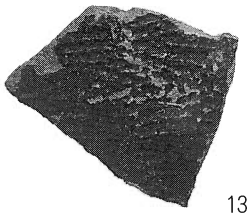
13－10

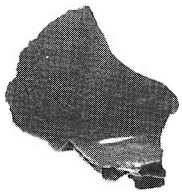

13－11

13－25

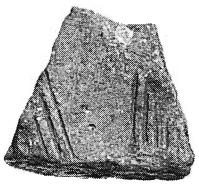

13－12

13－13

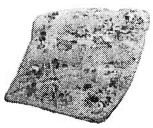

13－14


13－33

13－17


13－18

13－19


13－16

13－20

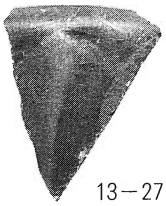
13－21

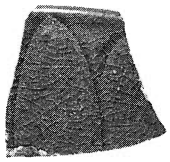
13－22

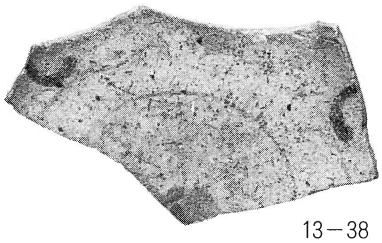
13－23

13－24

13－26


13－27


13－28

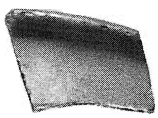

13－38

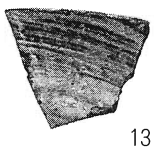
13－29

13－30

13－31

13－34


13－35


13－37

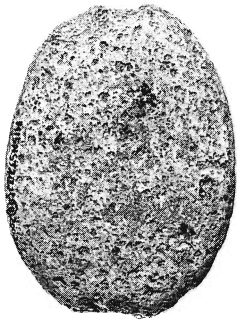
13－36

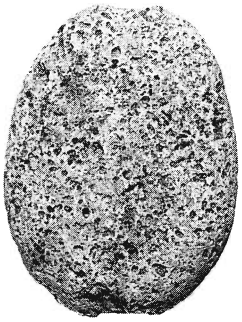
12－1

12－2

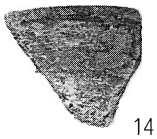
12－3

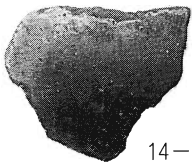
12－4




12－5

17－6

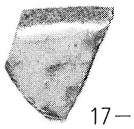

14－1


14－2

17－1

17－2

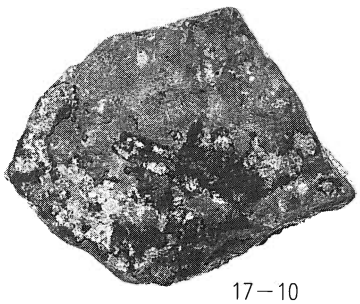
17－3


17－4

17－5

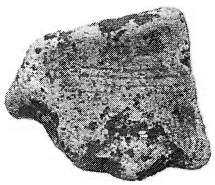
17－7

17－9


17－10

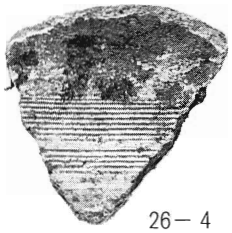
26－2

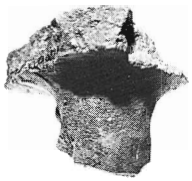
26－6

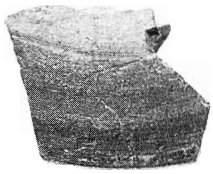

26－1

2～7区　出土遺物

図版16

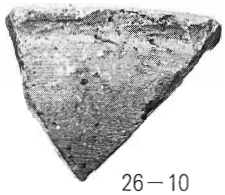

26－4


26－7


26－9

26－11

26－8


26－10

26－12

26－13

6・7区　出　土　遺　物

体験発掘の様子

報告書抄録

ふりがな	なかしょうじいせき
書　　名	中 小 路 遺 跡
副 書 名	平成１５年度ふるさと農道整備事業横田安富地区埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	松 本 美 樹
編 集 機 関	益田市教育委員会文化振興課
編集機関の所 在 地	〒６９８－００３４　島根県益田市赤城町１８－６
発行年月日	２００４年3月

遺　跡　名	所　在地	コード		北　緯	東　経	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号				
中小路遺跡（なかしょうじいせき）	島根県（しまねけん）益田市（ますだし）安富町（やすとみちょう）	３２２０４	Ｑ３４７	３４度３８分３３秒	１３１度４７分４４秒	２００３０５０８～２００３０８３１	農道整備

遺　跡　名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中小路遺跡	集　落	弥生～古墳 奈良～平安 中　世	竪穴住居址 掘立柱建物址 土　坑	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、瓦質土器、石　器	

中　小　路　遺　跡
ふるさと農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

平成１６年（２００４年）３月発行

編集・発行　益田市教育委員会
島根県益田市常盤町１番１号
印　　刷　益田市あけぼの東町８－１３
富士印刷株式会社